

五百子は落ちついた聲で、南清視察から説き起して北清視察談に移つて行つたが、段々後になるほど熱を加へて來た。左に、その講演の速記を掲録すると共に、その時の模様について少しく述べてみよう。

「戦地に於ける惨状、遺族救助につき、只今皆様よりお話のあつた通り、私は昨年一月十七日に長崎を出帆致し、二十三日に上海に到着して福建省に入り、二ヶ月滞在したのでございます。一體支那婦人は從來外國婦人と交際した事がないから、本願寺の方より私に——支那に参つて婦人と交際の端緒を開いて來い——と命ぜられました。それで私は彼の地の總督とか道臺とか財産家とかの婦人に交際した後、厦門に入り厦門から漳州にゆき、再び上海に歸り、浙江省の蘇州に参り三度上海へ歸つた時は、義和團が起つてをりましたから、南清に行つて又上海に歸つて來ると、團匪の騒ぎが益々甚だしくなつて來たので、直に韓國に渡り、義州から仁川を経て木浦に至り、只今下田女史より披露せられた通り、全羅道なる光州府の實業學校に三十日程逗留してゐる間に、太沽が大戦争になつたといふ事であるから、六月二十八日に歸朝して西京と東京との間を五六遍往復致し、又韓國に参り、十月十日の朝、仁川を出帆して北京に至つたのでございます。

それから太沽に着いて見ると、砲臺から三里ばかり沖に、軍艦や御用船が続いて泊つて居つた。一體この太沽といふ所は、白河の河口にあるので、その河は數十里通つてゐて、枝川が澤山流れてゐるから、そこには土堤が築いてあつたさうです。然るに、この河に、軍艦や御用船があると義和團の不利益になるから、彼等はその土堤を切り落してしまつたので、白河が横に流れるやうになり、従つて巨大な船艦が、沖の方にしか這入らん譯になつたから、我が陸戦隊は、上陸後非常に不自由な目を見ました。

それで、我が兵士が、いろいろ難儀をしたお話を、これから申上げます。

太沽から天津迄八十餘清里ありますが、その間、鐵道が通つてゐるから、私はそれに乘せて貰つて、天津に参つてゐると、宿屋も無ければ店屋もありませんから、領事館に泊めて貰ひましたが、見ると、その天井には大きな彈丸の痕が、幾らも、ボツボツ抜けて居つて、障子の如きは殆んど、疵のつかぬ物はない位に壞れてゐるので、實にその當時、戦ひの烈しかつたことを推測せられます。これに就き、領事の細君の働きを、一寸お話致しませう。

この細君は、鄭はま子（鄭天津領事夫人、大日本女學會々員）と申し三十六歳になられますが、決して私のやうに鬼の如き顔をしてをらない、至極美人でございます。戦争の始まつた時

には、召使ひの者共も皆通けてしまひ、只下女一人と細君とになつて居た。けれども少しも臆することなく、裾を端折つて飯を炊いたり、手負ひとなつた兵士の看護人となつたりして、働かれたといふ事です。私は従来多くの婦人に出遇ひましたが、斯様な婦人、即ち危い場所に臨み、靴を脱がず寢食を忘れて働くやうな方には、今回始めて面會しました。實に感服いたしました。それで居留民が——この奥さんのために、幾度か助けられ、この方のお蔭で何遍も救はれたから、何卒アナタが、日本へお歸りになつたら、國中の婦人に、女子の鑑として話して下さい——と言つたから、私は歸朝するや、諸方の婦人方にお話しました。それ故、ここにお出でになる方々の中にも、度々聞かれた方もありませうが、どうか十分御記憶を願ひたい。まさかの時に通けるやうでは、日本婦人といはれませんぞ。その事は永く、母親から子に傳へて、代々御記憶あらん事を、くどくも願ひたいのであります」

五百子は、かう非常の場合に處する日本婦人の覺悟に一鞭を加へておいて、又靜かに語り出した。

「天津から通州迄行くには、五晝夜かかりますが、そこを柴舟に乗つて参りました。これは白河の幅が狭くなつて、大きな船が這入らんから、小さい舟で往つたのであります。ついでに、

白河の水のことを、御話すれば、その色が、煉瓦よりも黄みがかつてゐる。斯様な水は私の國の河などで、洪水の出た時に見ましたが、東京邊では迎も見られません。白河の水は、さながら緒土を混ぜたやうな色であるから、それに米を浸して置くと、黄色く色が着きます。そのやうな水でも、ほかに飲料がなければ仕方がないから、飲料水として用ひたが、中々米を浸したり、飲む氣にはなれません。けれども、兵隊は、その水を飲料としたり、米を浸したりして使ふので、甚だ尾籠な話ですが、それが爲め、軍人方は殆んど下痢をせぬ人はない位で、私も三日ばかり下痢に苦しみました。それに天津から通州まで五晝夜間もかかる河中に、人間を始め豚犬牛馬等の死骸が、一杯はいつてゐる。私が、彼處を通つたのは、十月十六日頃かと思ひますが、急流でどんどん水が流れてをれば、その不潔な死體も往つて了ふけれども、兩側に水を分けたために、ほんの少ししか流れてをりません。それ故、澤山な屍が半分腐つて汐が退けば彼方に往き、汐が満つれば此方に來るといふ風で、その臭氣の甚だしい事、實にお話になりません。そのやうなひどい水で日本の兵隊達は、御飯を炊いて、食べてをられるので御座います

——  
貴婦人達は、眉をひそめて唯聞き入つてゐた。

「それから通州に着いてみると、ここは河が三方から流れてくる土地で、我が國で申せば、一寸、横濱のやうな、もつと大きい處でございます。これも詳しくお話したいが、今日は少し時間を急ぐから、長くは申しませんが、併し通州の状況は非常なものであつたから、新聞で御讀みになつた方も、猶よく御繰返しを願ひたいので、私はなかなか申上げられません。北京から四十里の間は、日本の如き道路が一つもなく、ただ玉蜀黍や高粱が植ゑてある。この高粱を私の國では只——モロコシといふが、赤い穂の下つたものです。それが白河の兩岸に繁茂してゐるばかりで——ところが、兵が太沾から上陸して、糧食を運ぶに、船が通りません。巨きな船は通じないし、小なな船では間に合はない、と言つて、戦争を止める事は出来ませんから、あの暑い時に、道路もない所を、重い鐵砲とか彈藥とかの如き軍器を持つて、兵士達は往かなければならぬ。これは實地に往つて見なければ、分らないが、いろいろお道具が無ければ戦争は出来ませんぞよ。それであるから、どうしても、病人が澤山出来なければならぬ道理だと、思つて私は見て來ました。一體、支那のあの邊は、雨が降らないから、酷い炎天には水は一滴も飲めない、のみならず黍畑をはたき倒して往かうと思つても、道路がないから、何も通らんで御座いませう。お前さん方この東京で、雪が降つてさへ、道がなくなつて、物や車が通りま

すまい、けれども、支那や朝鮮の道路は、どうしてそんなもんぢやございません。さうして砂塵が澤山起つ、兵士が馬を二頭並べて馳つて行くと、その身體が見えんほど砂塵がたつので、東京の塵の如きは物の數ではないのである。左様な中を炎天に軍器を、持ち運ぶのは、非常に困難ですが、その上に食べものがないから、大低血を吐いてしまふ。それで日本へ歸つては、もう働きの出来ぬやうな病人が、二千九百九十九人、これは陸軍の方で——海軍の方は二十七人であるが、尙この外に戦死をした人もあるから、私は大谷勝信殿の供をして、悉くこれらの人の墓參を致し、後弔ひをして懇ろに拜んで來ましたが、我が兵士が水を飲み得るざるため、少しでも水があるかと思ひ、高粱の穂を折つて噛んでみたが、左様な乾燥なる土地に育つたものには、少しも水氣がありません。

且つ、先刻も申す通りで、糧食がとどかんから、生の玉蜀黍と高粱の實とをポケットに入れそれを噛りながら、兵隊達が合戦をして、死んでくれたので御座います。貴婦人方、日本の御婦人たる人は、どうかこれをよく聽いて戴きたい。かういふ忠死を遂げてくれる方々が、あればこそ、日本婦人といつて、外國人に指もさされずに居られるのです。天皇陛下の御恩は申すに及ばず、陸海軍の方々が、忠死を遂げてくれなければ、わが日本婦人は、一日も安穩に

してはをられませんぞ。

これを——私は北京から太沽まで、戦死者の墓参をしつつ歸つたならば、我が日本婦人の方々に告げて、どうかこの戦死者の遺族に、襦袢の襟一つづつ義捐して貰ひ——貴方々の死んでくれたのは、決して無駄ではない、名譽の戦死である——と言つて、慰めたならば、靈魂も満足されるのであらうから、私の命のあらん限り、私の命の續く限りは何年でもこれを唱へて、この會を大きくしたといふ希望を抱いて、歸つて參つた。

私が昨年、福州に行つた時に、閩江といふ河を通航する船に乗つて往復しました、ここには數十百の船が居つて客を乗せるのです。甲板に客を乗せて、船底には、小兒も老人も一家族が住居し窮屈に暮してをつて、どんな風雨の時でも陸に上る事は出来ません。この人民は？と言へば、往昔清朝に従はなかつた明末の人民だから、今に至るまで、斯うであると聞き、實に驚いて歸りました。

次に朝鮮のお話をすれば、私が明治二十九年全羅道に行つた時、まだ木浦が開港前で東學黨の根據地であつた。それで本願寺から——あすこに日本人が行くと、度々殺されるが、もしそのやうな事があると、國のために不利益だから、我が國のために、身體を重んずるやうにしろ

——と言はれた、それから私は命にかけて、その地に這入つた所が、家屋も何もないから、苦を張り竹を立てて假小屋を拵らへ、田の中に凡そ九日程をりました。

右の如き未開の土地であるが、私はその翌年に、實業學校を創めて生徒募集としようと考え——ただ教へてやるら、時間を定めて來い——と言つた所が、先方の者が——貴方のお話が尤もだから來て上げたいが、時間を定めて學校に行く事が出来ません。それでも是非來いといふ事なら、毎日御飯を食べさせて、給料を二十文か三十文下されば、行つて上げませう——といふのである。

私はこれを聞いて、驚いたの愕かんのぢやない。實に言ひやうがないから、早速京城に駈けて來て、加藤公使に——かくかくの事を申しますが、どうして生徒募集したら宜うございませう——と話した所が、公使が——何もさう驚く事はない。先年私が此の京城で日曜學校を立てた時にも、毎日飯を食はしてくれなければ、生徒にはなれないと言つた。日本で言へば、此處は韓國の東京であるから幾等か開けてゐる譯なのに、それですら斯ういふ事を申す。ましてお前の學校を立てた土地は、邊鄙だからその通りしなければいけない——と言はれたので、私はいろいろ考へた末、一村毎に人氣をよせ、人の集まつた所で教授をして歩いたが、到頭一年

間草鞋を脱かずに辛抱して居つた所が、後には先方から私の方へ来るやうになり、私の方から先方に行きまして、巡回して教へてやりました。

それから彼の地の警察署に一寸用事があるから行つた所が——今罪人を檢べてゐるから暫らく待て——といふ事で、どうせ待つなら、と思つて其の様子を見てをつた。すると彼の地の地方官、即ち觀察使は日本の縣知事よりも勢力が強く、裁判權も何も皆一手に持つて居る。政府に言はず觀察使きりで、人を殺したり何かするので。それで如何なる有様を以つて、罪人を檢べるかといへば、土間には板が置いてあつて、その上に罪人を俯伏しにし、頸と胴と足の先とを荒縄で縛りつけ、罪人のお尻をまくつて置いて、横側の方から肌を脱いだ者が、無暗に十ばかり叩くと、お尻が紫色になつて肉が腫れて来る。すると罪人は唸り聲を出して、ヒツヒと叫びながら、後にまはした手を上に向け、兩方の指を一本づつ折り勘定するやうな風をするが兩手の指が悉皆折れて了ふと叩くのを止めるので、その有様といふものは、實にお話になりません。終ひには棒にお尻の皮が着いてしまつて、血潮がタラタラと流れます。

私共先祖代々この國に住まつてゐるが、何時の世にも此處に來られんとか、どこの者は上陸してはならんとか、言はれた例がございませぬ。ところが支那の閩江閩江なる船中に居る者は、三

百年來上陸する事も出來ず、船底に生活してゐる。又朝鮮に生れたものは、今お話したやうな目に遇はなければならぬ。然るに御同前様は運好く、この日本に生れたものだから、かうして安樂にして居られるのである。皆さん方、これで國恩の廣大なる事を思はなければならんぞ。不幸にして、そのやうな國に生れたならば、實にお話にもならぬ酷い目に遇ふ所であります。

然るに、國は小さいが、三千年來の昔から、天皇陛下の御稜威の下に生れたればこそ、外國婦人に對し、日本婦人だと威張つて交際するも、指一本さす者が無いのです。してみると御同前は餘程、運の好い事と思はねばならん。私はそれ故、學校へ行くと話します。從來は子供に爺婆の話をなすつたらうが、今後これを全廢にして、我が國民は格外なる國に生れてゐるか、その恩の廣大なる事を知らせて貰はなければならん。

皆さん、子供の教師として、母親より近い者はございますまい。學校の教師は、朝九時から三時迄しか、子供につく事は出來ない。その餘の時間は、母親の側にのみ居るのです。故に母親が格外なる君ありといふ事を、教へなければならん。これは第二の母となる方に願つて置くのみならず、苟しくも、日本婦人たる人の耳には入れて置きたいのです。もし日本の陸海軍が弱かつたなら、御同前は、かうして疊の上にはをられません。これを私はくどく言ふが、どう

かこれから子を育てる母親は、しつかりして御教授願ひたい。しかし都會に居られる御婦人方には、新聞や雑誌もあるから、左程申すに及ばないが、田舎の僻隅に居る者は何事も解らない一郡中に新聞をとる家は教へる程であるから、發起人が、これから手を擴けて各地方を巡り、我が國運の廣大なることを言ふて聞かせようと思ふから、貴婦人方もどうか、襦袢の襟を一つづつ儉約なすつて、この會に御入りあらん事を希望致します」と結んだのであつた。

なみゐる婦人方は、咳一つする人もない位に、靜肅を極めてゐた。

つづいて私が、時の海軍々令部長で海軍大將伊東祐亨子爵の代理として登壇した。(伊東大將は臨席してゐたが咽喉を痛めてゐた)それから堀内少佐(今の陸軍中將堀内文次郎)黒川陸軍中將、大内青巒氏等の演説があり、最後に島田三郎氏の挨拶があつた。

かくして、趣意書も發表され、その發會式が了ると、社會の同情は翕然として集まつた。中でも賛同参加の先鞭をつけたのは、朝鮮釜山の日本婦人會であつて、二百五十名もの會員が金六百五十圓を送つて來たのだ。その次が京城婦人會で、これが五百九十二圓であつた。そしてその、三月下旬には、岩倉公爵夫人を會長に戴く事となつた。

## 熱誠譜(二)

近衛公を始め幾多の支持者を得て、五百子が終生の大事業たる、愛國婦人會の誕生をみたのは、前記の通り明治三十四年二月の事であるが、その頃の五百子の熱心さと來たら驚歎に價するものばかりだつた。今その最も代表的な一くだりを記してみる。

明治三十四年三月の初旬——といふと、まだ愛國婦人會が設立して、一ヶ月と経ない頃だ。最初彼女がその本據たる事務所として選んだのは、東京の九段坂下牛が淵にあつた日本體育會(現在愛國婦人會本部となつてゐる)の門番小屋だ。それは、八角形の小さな室だつた。そこには古びた椅子が一脚きりしかなかつた。そして小屋の横には、石油罐を切りぬいて箱のやうにしたのが一つかけられ、それに白い紙の綴ちたのが吊されてあつた。全くそれだけであつたのだ。

五百子は、私方から毎日そこに通ひ、ここを住居としながら、さうして街頭に表はれては、道行く人に、愛國婦人會の入會を勧めてゐた。

さうした五百子の熱意は、結局人の魂に強い何物かを植えつけずはるなかつた。そして彼女の街頭の獅々吼は、間もなく東京中の評判となつた。

かくて、六月には、佐藤正少將に請ふて、専ら會務の整理に當つて貰ふやうになつた。更に七月には、内務大臣内海志勝男爵より、全国の府縣知事に對して、本會擴張の援助を懇請して貰ふといふ段取となつた。で五百子は、これを機會に、全國遊説の計劃を、本格的に實行する事となつた。

この講演行脚は、藥瓶携帯の五百子が、三十七年の二月十四日、大分市の會場で壇上多量の血を吐く迄、前後三百五十餘回といふ澤山な場数を挙げ、その足跡の印するところ實に一道二府三十九縣に及んだのである。その日程、場所等の概略を示すと次の通りだ――

明治三十四年四月二十日、京都市南禪寺町金地院方丈に於ける演説は、五百子が會旨演説の皮切りだ。この月五月中旬迄五百子は京都に滞留して、市議事堂を始め女學校其の他に於いて演説會を催し、九月中は歸京。更に十二月から翌年二月へかけて、大阪、兵庫、神奈川の各地を巡歴した。

三十五年四月、五百子は更に近畿地方の遊説を思ひ立ち再び京都を振り出しに、滋賀、岐阜

愛知、三重縣下を巡遊し、六月初旬神奈川を経て歸京した。しかしユツクリ身體を休める暇もなく、その七月十日には上野を立つて北海道遊説の途につき、札幌、小樽、旭川、室蘭、函館等で講演會を開き、八月中旬病氣を得て歸京した。が、もうその十月には又々長野に向ひ、十

一月中旬新潟地方を経て歸京、更に十二月には四國方面へ出かけた。

三十六年四月からは、近畿、關東、北陸、四國、九州の旅に日を過した、そうして三十七年

二月大分にて壇上血を吐いたのである。

この苦しい遊説の間にも、五百子は身を持する事儉素であつた。必ず自分の金と婦人會の金とは別々の財布に入れてゐて、毎日の宿の如きも決して普通の宿には泊らなかつた。大抵は木賃宿か、でなかつたら大谷派東本願寺の末寺に泊つた。本願寺の末寺に宿泊する事は大谷光演師のはからいだ。

又時々好意ある會員の宅に無料で厄介になる事もあつたが、普通宿泊は何處でも五十錢以下と定めてゐた。

汽車は何時でも三等であつたが、六時間以上の長丁場は疲れて講演に障るので二等にした。そして同行者には何時でも、かういつてゐた。

「半襟一かけの涙の籠つた會費の中から、かうして運動してをるのだから、一厘だつて無駄にしては相濟まぬ。宿屋は木賃宿か、本願寺の末寺か、それで辛いといふ人は、同行を御断りする」

しかし、何分にも老體の上に病體の事だつたから、行く先々で心配して、それ相當な宿屋に泊らせようなどとして、無理に案内したりすると怒つて飛び出して終つた。

かくの如く、専心邦家のために身を犠牲として甘んじた五百子である。而も、若い時から只管國事に奔走してひどい貧乏暮しを續けた爲め、病氣が身體中にあつて、胃腸などは不治の痼疾となつてゐたのだ。

だから、この講演行脚中も、青山博士の處方によつて、いろいろと胃腸の處理をしてゐた。

靴には何時も、胃腸の悪い時に御飯代りにする煎米だの、それを始末する油紙、金盥などいふ七ツ道具を持ち歩いてゐたのである。

しかし、その努力は空しからず、愛國婦人會設立以來僅か二年そこそこで、もう會員は四十萬を越えてゐたし、明治三十六年の三月には、長くも、閑院宮妃殿下を總裁に奉戴するといふ光榮に浴してゐたのだ。

この時の令旨は、

令 旨

我が愛國婦人會は、諸氏が赤誠を集めて慈惠の美果を着くる事を得んとす、今より益々斯會の培養に怠らずば遂には君國のために身を致したる、幾多軍人の志魂を慰め、遺族の窮困を救ふ事を得べし、我れ今日諸氏の望みに従ひ、ここに總裁たる事を諾し、以て斯會前途の發達希ふ。

明治三十六年三月二十二日

愛國婦人會總裁載仁親王妃勳一等 智 惠 子

五百子は、この時、令旨を押し戴いて嬉し泣きに泣き入つて終つたものだ。會の基礎はこれで愈々大磐石だ。會員諸氏の喜びも亦大變だつた。

ところが、更に同年十一月には、東伏見宮妃殿下、山階宮妃殿下、賀陽宮妃殿下、久邇宮妃殿下、梨本宮妃殿下、伏見若宮妃殿下に名譽會員に推戴する事を御願ひして、それぞれ御聽許



を得たのである。そして十二月には、更に各支部に新たな顧問一名を置く事とし、之を地方長官に囑託することとなつたのである。

丁度この頃の事であつた。かうした努力精進の大苦闘時代にも、また次のやうな二ツの五百子らしい面白い話もあるのだ。

全く、事業の事では、眼中人儔なく、王侯將相なんのそのと云ふ堅固不拔の信念で生きぬいてゐたやうな此の五百子も、愛國婦人會が日と共に旺んになるにつれて、諸方から揮毫の依頼を申込まれるのには、實際弱つてゐた。

ある時など、私へ寄せた手紙の中に、

手習ひをきらひし罪のむくひ來て

苦しきことが日には二三度

と、悲鳴に似た一首を詠んだくらゐである。

そして、東京にゐる時で、揮毫の依頼を受けた時は、私の所へ飛び込んで來てはそら文句を選べ、そら手本を書け、そら墨を擦れ、そら筆を貸せ、といふ騒ぎで、全くこの女丈夫も青息

吐息の有様を呈してゐた。

だが、段々それも度重なると、相當筆度胸も出來てきて、ある時、私に向つて、「字を書くには、藝名が要るちうことだから、五百子にも、よかとを一つ、つけておくれませしえ」

と云ふ話だ。滑稽といふよりも、雅號の事ぐらゐを心得ぬ五百子でもないのに、ことさら雅號を「藝名」と言つたところなど、どこまでも五百子らしく面白い氣がする。そこで私は、「それぢや、少し待つてくれ」

と言つて、一晚考へた結果、つけてやつたのが「三無婆庵」といふ藝名である。

私の考へでは、この——三無婆は産婆に通じるので、即ち愛國婦人會の、とり上げ婆さんと云ふ意味、これが一つ——それから又讀んで字の如く、三つ無し婆さんといふのは、奥村刀自の成功を齎らす上の秘訣として、普通では中々持ち得ないもの、つまり普通人に無いものが三ツある。その一は——私心無きこと、その二は——懸引無きこと、その三は——負け惜しみ無きこと、この三つなのである。

それで、まづこの私心ないと云ふ事を説明すると、前にも記した通り、五百子が郷里唐津

で、鐵道を敷く事、又は、五町からもある長い松浦橋を架けること等いろいろと可成りな大事業をやつてゐるのに、いつでもそれが無報酬だつたといふ事だ。

そして、家族の者や知人が、

「そんな馬鹿けた事があるものか、相當の報酬を受けるのは、當然の事ではないか」

と言ふのに、女史は斷じて、これを肯んじなかつたのである。

それから、懸引の無いといひのは、女史はいつでも、卒直に赤裸々に自分の希望する點を相手に話して、相手が承知するまでは只この一點で押し切る。これも私心のある者には出来ない藝で、伏仰天地に恥ぢずと云ふ境地に立ち得る五百子のやうな人にして、始めて行なひ得る事なのであらう。

さて、その三の、負け惜しみ無しといふ事は、五百子は、一度自分が間違つてゐたと氣がつくと、何等の未練氣もなく、悪かつた、悪かつた、と云つてサラリと過ちを改めたものだ。誰にしても人間である以上、過ちや考へ違ひのないと云ふ事はあり得ない。處が、それを彌縫しようとする、つい心にもない嘘言を吐くやうになつたり、又一つの嘘を掩ふ爲めに、遂には十も二十ものウソを作る事になり勝ちなものである。が、五百子には、全然それが無かつた。

所謂光風霽月、實に竹を割つたやうな氣性であつた。

この三つが無いと云ふ處から——三無婆庵と名づけた私は、絶えず、さういふ風に考へてゐる。政治家にしる實業家にしる、それぞれの要路に立つ人には、この三つのものは、大切な教訓だと思ふ。だから此の點については、それらの支配階級の人達は五百子に、大いに學ばれることを希望する。

又——ある日伊東大將に愛國婦人會の件について、大變駄々をこねた事がある。つまり出来ない相談を吹きかけ困らせたのだ。しかし本人は自分自身の爲めではなく、皆お國のためだと云ふ自信があつて、言つてゐたのだから愈々始末に悪い。とにかくもつと伊東さんの力で、五百子に地方へ出た時、もつともつと便宜を與へて呉れろといふやうな願ひ入りだつた、が、それが餘り突飛な事だつたので、伊東大將が、困るといつた。そして、どうしても承知しないので、たうとう、大將は五百子を、ひよいと抱き上げ、

「どうだ、どうだ、まだ無理を云ふか、言ふなら、どうだ——ほら、ほら、ほら」

と、さも輕るやかに、あしらひながらベランダへつれ出して終つた。

實際、大將は五尺八九寸もある堂々たる巨漢であつた。五百子も、流石にその時は、參つて

しまひ、大將の巨腕の中で悶搔きながら、

「もう無理は申しません、申しませんから、どうぞ許して下さい、許して下さい」と、懸命に、まるで子供のやうに喋つてゐた。

明治三十五年四月一日、帝國軍艦淺間（旗艦）・高砂の二隻が、常備艦隊司令官伊集院五郎少將指揮の下に英國渡航の命を受け、私が淺間分隊長に補せられて出發することになつたのを祝されて、五百子は次の書簡を私に寄越した。

一筆御祝ひ申納まらせ候。扱此度は存じよらぬ御目出度御事にて實に御嬉しく存上候。御前様御一代の御名譽ならず御子孫迄御名譽一入御目出度申納まらせ候。嬉しさのあまりに

名も高く船出したもふ君なれば

古郷へ錦きて歸り給へ

御伺申上事も申上度事も海山に御座候へども、何れ近日御目もじの上萬々申上度、先は御よろこび迄。荒々めで度かしく。

三月十四日

小笠原長生様

抑も、我邦に於て歐式海軍設立以來既に五十年になるが、皇國軍艦が艦隊を編成して歐洲に回航する事は、空前の盛事であつて、我が海軍史上に特筆せらるべきものであるから、私としては此の上もない光榮に相違ないが、奥村女史より斯くの如き懇篤なる手紙に接しやうとは夢にも思はなかつた。仍で、夫れから五六日經つて五百子に面會した節、

「君に交友十五年、未だ嘗てあんな女子らしい手紙に接した事がないので、なんだか勝手ちがひがして面喰つたよ」

と冗談を云ひしに、五百子は例によつてハツハツと男笑ひをし、「これや酷か！ 五百だつて女子ですたい。これでも昔は戀されたこともありますッ。あまり馬鹿にしますな」

なる程、然ういへば五百子が二十歳前後の頃は、高德寺の御嬢と云つて可なり評判が高かつたさうな。餘計な事だが書添へておかう。

## 行脚土産

五百子の講演行脚中には、随分彼女らしい奇抜な愉快な挿話も澤山あるが、その中の三つ四つを紹介しておかう。

先づ何處へ行つても、驛へ出迎への有志に五百子が一度に挨拶をした事である。これは洵に無理ならぬ事で、何處に行くにも前以つて縣知事に通じてあるから、土地の有志がズラリと出迎へる。それに一々挨拶してゐてはやり切れない。そこで、驛へ立つと直ぐ一人づつ挨拶に来る人を制しておいて、

「一寸御待ち下さい。皆さんはそこに並んでいただきたい。私は一人で皆様は大勢です。一人一人頭を下けるとなると、皆様の方は一ペンでよいが私は五十でも百でも御人数だけやらねばなりませんから。頭がフラフラします。それで私のまごころの一禮だけで御許して下さい」と、かう出迎への人々が並ぶと、落ちついて挨拶してゐたものだ。そして又必ず、

「皆様、私は奥村五百子です。今日は國家のため、わざわざ御出で下さいまして、御苦勞様で

した」

と、つけ加へてゐた。

こんなところにも五百子らしいものがあつて、微笑まれる。

それから、石川縣下遊説の日の事だ――

それは秋も深い、とある古寺を會場として講演會が開催された時だ。

五百子の熱辯に動かされて、入會者も相當あり、來會の婦人達が殆んど去つた後、洗ひ晒しの木綿の筒袖を着た三十そこそこの見すほらしい婦人が、一人だけ居残つてゐた。

五百子が別に氣にも止めず、奥へ入らうとすると、始めて「先生！」と、その婦人が呼んだ。

五百子が振返つた途端、大きく御辭儀をした、その女の人は、恥らひ氣に言ふのだつた。

「先生、私は、いやしい車夫の女房です。それでも、よろしかつたら、どうぞ、私も、御入會させて戴けますまいか。草鞋を作つて内職したお金、一圓ここに御座います、兵隊さんが、戦地で、そんなに御難儀をして、ゐられるとは知りませんでした」

それは車夫の妻であつた、さうして其の目には、涙さへ光つてゐる。五百子も鼻のつまる思ひで思はず手をとつて言つた。

「ありがたう、ありがたう御座います。日本婦人の、やさしい、それが立派なまごころです。あなたこそ、あなたのその御心こそ、本當の日本婦人の御心です。私は、その御心がけを聞くだけで、嬉しうございます」

「はい、よく分りました」

やがて、車夫の妻は、銀貨や銅貨をとりまぜて一圓——それを五百子の前へ、ややためらひながら差し出した。

五百子は、その時、字が書けないといふので、代筆して入會申込書をこしらへてやつたのである。

習朝、五百子は、車夫の家を訪ねて行つた。

車夫の妻は大變驚いた。五百子の手には一枚の立派な肌着が持たれてゐた。

「昨夜は、本當にありがたう。どうしても私は貴女に、御禮をいはぬと、この地が去れないので、参りました。どうかこの品を納めて下さい——これは東京を出る時、さる高貴の方から、私の老體を勞はつて、頂戴したのですが、いはば、あなたのやうな心の美しい方に、下されたわけです。私がつてゐても、あなたが持つてゐても、同じ事ですから、決して遠慮をせず

に納めて下さい」

「はい、はい、でも、あまり勿體なうございます」

とて、車夫の妻は、涙にくれて、どうしても最初のほどは辭退してとらなかつたといふ。

又、事務員の龜岡豊藏と、信州の松本に行く途中、鹽尻峠にかかつた時——

二人は草鞋ばきで舊道を辿つたのだが、ひどい道でヘトヘトに疲れて終つた。が、疲れたなどとはおくびにも出さない五百子だ。草鞋擦れで踏み出した足のまめについても、微塵も痛いとはいはず、山と山との間から富士の仰ける場所に辿りつくと、石に腰を打ちかけ、黙つて唯登つて來た道を振り返つてゐたのだ。

龜岡も、さういふ五百子の性根を知つてゐるから、苦蟲を噛んだ顔して辛抱しながら何言もいはずただ腰をたたいてゐた。やがて五百子が言つた。

「龜岡さん、こんな腰折れが出來ましたぞ」

「どんなのが出來ました？」

「諏訪の里、たち出でくれば、鹽尻の、峠の上に、富士をみるかな——どうです——」

「なるほ……快潤な御氣持が、よく歌はれてゐますなあ……」

この夜、五百子は松本の宿で、日記にかう記してゐる。

——愛國婦人會のことわけを、人々に示さんとて、信濃路にもものしけるほど、諏訪の里を出立ちて、鹽尻峠なんいへるけはしき山を越えけるを、富士の根のながめえもいはれず、いみじけれど、すぐるに歌のうかびける。

諏訪の里たち出でくれば鹽尻の、たうけの上に富士を見るかな

明治三十五年十二月吉日

奥村 五百子

それから越後の旅は長岡に延びたが、この夜、講演會も終つて、五十錢の旅客となつて、日記などを認めてゐるところへ、面會人がある事を知らせて來た。

男の客だ。あまり目だたない身なりの其の男は、鄭重な調子で、両手を突くと言ひ出した。

「本日妻が、御講演を聞きに参りまして、ひどくふさぎ込んで戻つて來たので、たづねてみると、御話の次第を物語り、是非自分も入會したい、しかし、自分の腕で働いた金も何もない、それが恥かしいと、かう申すのでございます。なるほどと私も思ひ感動いたしました。

實のところ、私達夫婦は、金には困つてをりませんので、妻も贅澤をしてをりましたし、妻自身働く事も知らねば、貯へといふ事も知つてゐませんでした。それが、やつと今日冥利に盡

きてゐる事と、分りました。それが本當の力、本當の力のこもつてない金で、これまで暮して來た事が、分つたのです。全く、妻の申す通り、入會の資格はないのですが、かう目が覺めました以上、本當の日本國民になるやう勉強いたしますが、先生のおはからひで、どうか入會させて貰へますやう、御願ひ申します。夜分おそく、失禮とは存じましたが、妻と相談ついで、私がかうして参りました」

かう言つて五十圓の寄附金を、差し出すのだつた。

「よく仰有つて下さいました。ありがたう。お金は私が扱はぬのですが、御心に對してお預り申しませう。その御心がけで、お國のために御盡し下さい。奥様によろしく申して下さい。で失禮ですが、御名前を聞かせて下さい——」

「ここでは名前など、申されません」

五百子も追求して訊かなかつた。しかし、あとで宿の者から、その人が、土地で有名な相場師の川上佐太郎である事が分明了。

また甲斐國韮崎で、こんな話も傳へられてゐる。

その夜は、山國の夜の寒さが、ひしひしと骨身にこたへるきびしさであつた。

場所は矢張り宿の一室だ。襖一重隣室で、若い男と女のさざめきがつづいてゐたのだ。いつものやうに日記を記してゐた五百子は、この宿が、隣室のさざめきや、あたりの様子から推して、どうも怪しげな事もある宿だと気づいたのだ。

「御免下さい」

隔ての襖を披けて、突然五百子が這入つて行つた。男は三十位、女は二十三。それが、五百子の鋭い眼光に射すくめられた形で、不安さうにちつと見上げてゐる。

五百子は靜かに口を開いた。

「私は奥村五百子といふ者です。突然進入した無禮は、御許し下さい。さて私は、お國のために、こんどわざわざ、當地へ参つたのです。この婆が、この寒空に、何故、かうして諸國を歩き廻つてをるか、それを是非、あなた方二人に知つて戴きたいのです」

こんな調子で、白河の水と兵隊の話、牛や豚や人間の屍の話、そして、自分の腕で稼いだ半襟一かけの愛國婦人會の話等が、長い間、喋られた上、

「お國のため、困つてゐる人を、助けようといふのが、私の旅の目的です。そして、お國の爲めにならうといふ、随分立派な人々とも大勢御會ひしました。こんな旅で、あなた方二人のや

うな人を見るのは、失禮ですが不快ですぞ。私は黙つて、この町を通り過ぎる事は出来ません今夜限り、こんな事はおやめなさい。私は今夜限り、二人が清淨な氣持になつてさへ下されば百千の會員を得たより尙うれしいのです。こんなに國家多端な時に、貞操を賣つたり、お金で貞操を弄んだりしてゐるのは、不都合千萬です。分りませんか、分らねば、この婆は、分る迄二日でも三日でも、お話をせねばなりません。自分の身は犠牲になつても致さねばなりません

——

淳々とき、爛々と輝く五百子の目だ。

女は泣き入つて終つた。男が、多少不満さうにいふのだ。

「すみません、よく分りました、これも酒のためでした。私は商人ですが、國家のために税金も納めてをります。今後は、こんな事、注意をします——」

「いいえ、まだあなたには、よく分つてをりません。それは理屈です。酒のせいにして自分が悪い事を、かくさうとしてゐなされる。また税金を納めてゐるからとて、それだけでよいと思つてゐるのは、いけませんぞ、卑怯ですぞ。なるほど納税も一つの御奉公だが、何故もつと、立派に御奉公を仕様と御考へにはならぬのですか——」

たうとう夜明けまで、説きつづけた五百子だつた。男はうなだれて、一言も發せずにいるのだつたが、流石に、肝に徹したと見え、

「本當に酒の上とはいひながら、根本から思ひ違ひをしてゐました。家へ歸つて、妻に懺悔します。そして早速女房を愛國婦人會へ入會させます。そして、私も本當に眞面目に、お國のためを思つて、働きます——」

とキツパリ言ひ放つた。

五百子は喜んで、

「これで私も安心、元氣よく旅がつづけられます。ああ、もう夜明けです。お二人さん、戸外に出て、お日様を拜まうではありませんか。太陽に合掌してをると、心の曇りは皆退散しますあなた方が、生れ變られた御禮を、御日様に申上げませう」  
そして、三人心よく別れたといふ。

### ひたむき奉公

#### (一)

五百子の努力奮闘に、なみなみならぬもののある事は、既に御分りの事であるが、この奥村五百子を愛國婦人會の會祖とするならば、さしづめ、この五百子に多大の共鳴と盡力をよせられた近衛篤磨公爵こそ、その宗祖といふべき人であらう。

實際、五百子が近衛公を信頼もし、又いろいろと遠慮なく何かと相談をもちかけてゐた事はすさまじい程だつた。また公としても、非常に五百子を信じてゐられたし、その事業に大きな期待もかけられてゐた。

無論、愛國婦人會は五百子が主唱し創立されたものであるが、之を援け勵まし、そのお膳立をしたのは近衛公なのだ。如何に五百子が趣旨が立派だつたとはいへ、當時公がなかつたならば、この會の創立は或ひは不可能だつたかも知れないのだ。それほど五百子にとつても會にとつても公は大切な存在だつた。だから愛國婦人會では、事ある毎に、會祖奥村五百子と共に近衛公を祭るのを例としてゐるのである。



その近衛公が、三十七年一月、恰も會が隆々たる勢ひで發展の途上にある最中に、薨去されて終つたのだ。これは會にとつて最大の損害であると共に、又五百子にとつても最大の悲數であつたのだ。

公は、その前の年の六月頃から、もう大分病勢が進んでゐたのだ、五百子は七月三日、氣になるままに、山梨の遊説から引返して公を訪ねてゐる。その時は久しぶりで、二人が快談したといふ。

「どうも日本人は、まだまだ國家といふ觀念に乏しく、皆めいめに自分勝手な事を考へてゐるやうです。こんな事では、全く、將來が思ひやられます。金でもあれば、すぐ太平樂をならべてをつて、一度、社會の事、お國の事となると、知らぬ顔をしてゐる人間が、多いのですねえ。無い者は無い者で又、自分の事ばかりで、あくせくしてゐるし、これは今の中になんとかせねばならぬ大問題です」

五百子が、沁々とかういふのであつた。すると病氣のせい、公爵もひどく興奮した調子で「全く、今の人間は駄目だ。頭に火でもつかないと、目がさめぬのだ。やはり、地方へ行つてぢかに、あなたのやうに教育するより途はない。わしも元氣だと、方々へ出かけて、演説でも

何でもするんだが——奥村さん、あんただけでも、懸命にやつて下さい」

「やります、やります。私は、次には、關西へ出かけて、うんと嘸鳴つて來ます」

「さうとも、命がけて嘸鳴つてゐる中には、何か反響があるものですよ。頑張つて下さい。婦人會もあんなのその意氣で、やつと今日の日が見られたのぢや。東京から幾等地方官へ頼んだり立派な規則を作つて送つても、効果は知れてゐる。なんといつても地方に行つて、直接掛合はないと駄目だ。地方へ根を下した事業は、永久的だ。それには、あなたの力、信念、熱辯、それが一番適當だ。命よりも人間は事業だ。明治も順調に行き過ぎとる。人間が浮華輕佻になるのも當然の事だ。しかしこのままでは、功利的な利巧者ばかり増えて、日本が危い。あなたのやうな馬鹿者がどんどん出て來ると、いけぬ。今に日本にも國民の目覺めるやうな非常時が來るだらう。東洋の前途は決して平穩ばかりは續かない。だから今の中から、ポツポツ目を醒して置かぬとならぬのぢや」

「私は大いに馬鹿を發揮して、嘸鳴り散らします」

「さう！日蓮上人のやうに先んじて、叫ぶ人は、惡と呼ばれ狂といはれる。しかし、日蓮出でて元寇を殲滅する國民の勇氣が出た」

「公爵、あなたの御話を聞いてをると、一日もちつとしてはゐられません。私はこれから直ぐ旅立ちます。一日も早く御全快になつて、婆の歸るのを待つてゐて下さい」  
かうして別れた二人だつた。

近衛公を無くした五百子の心中は、思ひやられるものがあつた。彼女は公爵亡き後も、愛國婦人會設立の懷舊談となると、必ず、

「近衛公がなかつたならば、愛國婦人會は出來てゐなかつたであらう。公爵こそは、本會の生みの親です」

と、いつも涙を催して、かう言つてゐた。

## ひたむき奉公 (二)

北清事變以來、日露の關係は、次第に緊迫してゐたが、たうとう三十七年二月八日には兵火相見ゆる事となつた。それは近衛公が亡くなられて一ヶ月そこそこの事であつた。

ロシアは、嚮に我が國が馬關條約によつて獲た遼東半島を還附させて置きながら、その後、

租借を名として旅順、大連を我がものとし、北清事變のドサクサ紛ぎれに際しては、滿洲を占領し、更に進んで朝鮮をも其の手中に收めようとしたので、帝國も遂に我慢が出來ず、宣戰を布告をしたのである。

この戦ひは、帝國としては實に一國の廢たれるか興るかの大國運を賭しての戦争で、陸海軍の將兵は、一人一人が皆一死報公の固い決意の下に滿洲の野へ、續々と出立したのであつた

この時、

愛國婦人會では、全國の會員が、一躍七十萬を突破し、それが壯烈な軍隊の歡送迎をはじめ戦死者遺族を弔慰救濟するなど、わが國有史以來かつてなかつた婦人の國家的な偉力を發揮したのである。

五百子は、師とも思ひ父とも頼んでゐた近衛公爵を亡くして間もない頃の事で、ひどく力を落してゐたのであつたが、しかし、事業のためには、この一大機會をシツカリと握む事を忘れなかつた。彼女は早速、長崎から大分方面へ巡回講演に出かけた。そして大分へ到着すると、時間節約のため直ぐに會場へ乗り込んだのだ。

それは二月初めで、戦争の號外が飛んで居た頃だ。五百子は火のやうな言葉で聴衆の心をと

らへた。が、この大分の演壇で、突如多量の血を吐いて倒れたのだつた。場内は感動と驚愕で大變な騒ぎとなつた。直ちに同地の病院にかつぎ込まれたが、この報は全國の新聞に傳へられた。病體を押しての無理な旅行と疲勞のためだつた。

大阪にゐる長男勢一は心配の餘り、即刻、問ひ合せの打電をした。五百子は、それを讀みみると、看護婦に頼んで、

「心配するな、来るには及ばぬ」と返電させた。

愛國婦人會全國會員は、五百子のこの報に一層奮ひ立つた。

五百子は、間もなく、病體を唐津で靜養する事となつたが、愛國婦人會の使命を思ふと、この非常の秋に際して、ちつとしてはゐられなかつた。

この頃、本部では、總裁殿下から各職員へ、

刻下の時局に鑑みて、一層奮勵するやうに——といふ御諭旨が出てゐた。

尙その上、愛國婦人會の趣旨が上聞に達して、二月二十九日には、長くも 天皇陛下より金七千圓、皇后陛下よりは金五千圓の御下賜があつた。

續いて三月七日には、皇太子、同妃兩殿下より金二千五百圓の御下賜金があつた。

八月、五百子は少し健康が回復すると直ちに上京し、多くの遊説員と共に諸方へ馳せた。がさきに北清事變の際、戰場に於ける將兵の艱難辛苦を目撃してゐる五百子は、遂に、遊説員富樫眞喜子、野中彌知子、事務員手島益雄の三氏と共に、愛國婦人會を代表して、愈々出征軍隊慰問の旅に上つた。

皇軍將兵に、銃後の婦人が深い感謝の意を表してゐる事や、七十萬からの會員の活動ぶりなどを傳へて、少しでも士氣を鼓舞する事を使命とし又目的として征くと同時に、戦死者の母、又は妻の代表として弔ひに行くのだ。

一行は、五百子の創意になる、カーキ色の筒袖に同色の袴、同色のヘルメットに長靴、雨具携帯といふ扮装で、三十八年六月二十九日、新橋驛を發つた。

その日、ブラットホームには、岩倉會長、島津公夫人、近衛公母堂、谷子夫人、九條公夫人佐々木伯夫人以下八十餘名の人々が、ズラリと居並んで、その門出を壯とした。

これで戦地へは三度目だ、しかし、もう六十一歳の老齡である。如何に女丈夫の五百子とて、砲煙彈雨の中の傷病兵の慰藉、戦死者の弔問——といふ壯年の男でさへ無理な仕事に従事

するのだ。だが、火のやうな彼女の指導精神は、多数會員の覺醒と感激のために敢てこれを斷行したのだ。

「萬歳！ 萬歳」

汽車が動き出すと、銀鈴のやうな、聲の洪水だ。

品川驛では、毛利公の母堂が見送りに來てゐる。そして汽車の窓から見える同公の庭内では國旗を手にした多くの男女が、盛んに旗をふつてゐた。驛々には澤山な見送人だ。五百子と知らない人々は、軍隊の出動だと思つて、皆この異様の服装の一行を眺めてゐるのみだつた。

五百子は何處の驛でも、必ず見送人達に、窓から顔を突き出して、見送りの感謝と、會員たちの將來の希望について、三分間づつ演説した。

一行は三十日大阪に到着すると、五百子は、たつた一日の滞在にも八方を奔走した。そして大阪支部で軍人の遺族が多数よつて裁縫してゐるのを見ると、

「これは、支部の仕事として、模範的なものだ」

とて、その臨機の思ひつきに感じ入る有様だ。而も、そんな忙中にも、心の友廣岡淺子を訪ねて、むさほる如く國事を談ずるのだつた。

その翌日の午後四時、一行は六千餘噸の河内丸で神戸を出帆した。ここでも見送りの人は黒山の如くだつた。

「皆さんから御貰ひした物は、必ず兵隊さん達に御贈りします。皆さんの真心を、御とだけします」

小蒸汽船が動き出すと同時に、ばんざい、ばんざいのドヨメキの渦中へ、五百子は、ハツキリとかく呼びかけてゐた。

「戦地に征つたら、一言でも暑いなど言つてはいけません。また弾丸が飛んで來ても、首など縮めてはいけません。何もかも決死の覺悟で行くのですから、それに兵隊さんの事を思ふとなんでもない事ですから」

船中で、五百子が同行の者に申し渡した言葉はこれであつた。

丁度、船が玄海灘にさしかかると、五百子は甲板から少時づつと穩かな海面を眺めてゐたがその頬には滂沱と涙が流れてゐた。そして口には讀經回向をしてゐたといふ。曾て運送船常陸丸が無念の涙をのんで沈没した海なのだ、

やがて五百子は、東京を發つ時、岩佐評議員から頼まれてゐた地藏尊の刷物一萬枚を、一々

念佛を唱へながら海に流して、亡魂を弔つた。鐘の音も悲しく人々は等しく涙に濡れた。翌朝、朝鮮海は濃霧がはけしく、船は一分ごとに警笛を鳴らして進んだ。

ゆく船も返れる船も霧の中に、ただういするの聲のみぞ聞く

これは、五百子のその時の感懐だ。

### ひたむき奉公 (三)

七月七日――

五百子等が大連の大棧橋に横づけになると、立派な馬車が三臺迎ひに来てゐた。出迎へに来てゐる司令部の將校の話によると、この馬車は露人の置土産なのだ。

一行は、それぞれ分乗して、旅舎である元の軍政廳に着く。ここは露國將官の官舎だつたところである。

その日、早速、司令官と民政長官に面會し、種々打合せをしたが、翌日は不快の爲めに五百子は静養した。そして、青泥窪病院を慰問したのはその翌日の事だ。戦傷病兵は苦しい中にも

此の慰問の一行を喜び迎へた。更に病院長の案内で將校士卒の靈を祀つてゐる御靈屋に禮拜した。

戦病死者の名が、佛前に書き列ねてある。五百子は佛前の黒札に白字で、

「死者に仕ふる生者に仕ふるが如くせよ」

と説示の掲げてあるのを見て、讀經回向してゐる中に聲を曇らせてゐた。案内の人も一行も共に嗚咽してゐたのであつた。

墓場の光景は――寂寥たる緒い山の彼方此方に、まだ帽子や劍の折れたのが、散らかつてゐる。墓標は二本あるきりだが、一方に千四百四十人、一方に六百六十餘名の合葬者の數が記されてある。

五百子は肌につけて來た如來様の像を、山上墓標の前に安置した。

その夜は公園に兵士を集めて、慰問の演説が催された。會長が慰問狀を讀み上げた時、列席してゐる將校兵士達は、皆泣いてゐた。

翌日――

五百子一行は、旅順に到着すると、重村工兵少尉の案内で、最も多く戦死者のあつたといふ

所を弔ひ、松樹山、二龍山、二百三高地、東鷄冠山北砲臺を視察した。

ここは天然の要害である上に、露兵の工夫設備は——鐵條網、機關銃、鹿柴、狼狽、穹窿——といふ風に、又素晴らしく手のこんだものばかりで、我が兵の慘憺たる苦心のほどが思ひやれ、五百子は面を曇らせたのだつた。土囊には血痕が染み、まだ肉片の附着してゐるものもあつたといふ。而もこの土囊は、更紗、羅紗、木綿などで、露國の婦人が、壁掛け、テーブル掛け、敷物などで作つたものらしい。五百子は、ここでも防禦の苦戦の背後に、婦人の活躍をみてとつた。

寂寥たる緒土の山は、縦横に穿たれた坑道で、さながら鉢巻をされてゐる風に見える。

「砲臺が爆發した時、地雷が豫定の地點より近くで爆發した爲め、味方が三百二十名も、ここで生き埋めになつたのです。中には手一本、又は首だけを土中から出してゐるなど、この世の地獄でした」

重村少尉は、さういつて暗い面持した。

五百子一行は無言で、身體を硬ばらせてゐた。

五百子は連日の視察で疲勞しきつてゐたが、二百三高地を是非見たいとて、その時は手島益

雄に手を組んで貰ひ、富樫眞喜子に後押しをさせて、やつとその頂上に達した。ここにも二つの大きな墓標と、遙かに見える七師團の墓標を始めとして、四方には數限りもない戦死者の墓標が林立してゐた。五百子は一々それに讀經回向をして廻つた。

二百三高地の頂上に立つ女丈夫、六十一歳の奥村五百子の姿だ……

それから更に汽車で新戰場を通り、驛で麥茶の接待を受けながら遼陽に着いたが、司令官と面接して、首山堡の激戦の跡に戦没者を弔ふため、三里の間、ひどい泥濘を徒歩で行つた。

高粱や股をくぐつて夏の月

遼陽の塔にかかるや夏の月

これがその時の五百子の句である。

それから五百子一行が、奉天で、滿洲軍總司令官である大山元帥に面接したのは、首山堡とシャオンヤンズイの戦死者を弔つて後の事だつた。元帥室は天井が低くて床にはアンペラが敷かれ、粗末な椅子が數脚あるだけだつた。元帥は五百子の慰問を感謝した。

奉天では又、福島少將の案内で、同地に十年間も在住してゐて、今度の戦争で我が將兵を救護してくれた英國の醫師を訪ねて行き、御禮を述べた。

五百子は第一戦まで征く心組だったが、奉天に來合してゐる山縣元帥と面接したところ、もう華々しい戦もないから、これ位にしてはどうかといふ事だったので、その言葉に従つて引返すこととし、七月二十六日營口に到着した。

五百子は此の旅行中にも、時々例の胃腸病の痼疾に悩まされてゐたのだ。で丁度この頃滿洲に滞在中だつた京都大學病院の高山博士に診断を請ふたところ、根本的な治療をしないと駄目だといふ話だつたさうだ。おまけに二女の光子を水戸で生んで、産後の肥立も充分でない時に唐津へ引挙げたためその時の不養生がたたつて、未だに婦人病となつて残つてゐるのだつた。

五百子は、これらを手當しながら苦しい旅を續けてゐたのである。

この病軀でもつて、五百子は、營口、大連でも又々連日演説會を開催してゐる。會場は幸ひ非常な盛大で、その都度會員も多數に獲得してゐるが、その苦悶は思ひやられる。

五百子は、又、大連で一行と別れると、富樫眞喜子と共に、元の軍政署に宿泊し、間もなく安東縣に向つた。

八月七日、一行は安東縣着。七道溝に病死者の墓參をした後、ここでは支那人のために演説會を開催したところ、齋藤司令官の斡旋で多額の寄附が集まつた。中でも王化成といふ人は五

百子の熱辯に感動して、一萬圓を寄附したのである。

更に、龍岩浦、大同江を渡つて鎮南浦でも演説會を開いてゐる。そして十六日に京城へ到着したが、この地では二十八日迄身體の保養のために滞在した。それから仁川、大邱、馬山浦等でも慰問演説や會員の募集に大變な奮闘ぶりをみせ、九月二十六日、大邱より釜山へ來て、釜山門司連絡船の豊岐丸に乗り、多くの歡送人と別れを告げて、愈々門司に到着したのは二十八日であつた。

門司から一時郷里へ引舉げて來た五百子は、暫時、ここで靜養することとした。

折りも折り、この時、東本願寺の光演新法主の巡錫があつたので、五百子は激雨を冒して、五里の坂道を、鬼塚といふ所まで出迎ひに出たのだ。それは實に病身とは思へない元氣であつたといふ。五百子は全く、如來様の信仰と、一すじに國家を思ふ意氣だけで動いてゐたやうだ。

光演法主も、これには驚いて、高德寺から私宛に、右の由を認めた書翰をよこされてゐる。

結 び (一)

十月十五日——

女史は、元氣で歸京すると、すぐその足で私を訪ねて来てくれた。面接すると、女史は恭々しく懷中から一つの包みを取り出して、幾度かおし戴いて念佛を唱へながら、これを開いたのであつた。するとその中には古色蒼然たる一體の佛像があつた。女史は、これを床の間に飾つてから言つた

「なんぞお土産に、あなたへ有難いものと思つてみましたら、この佛様が手に入りました。これは朝鮮の北部で掘り出されたといふ佛様です」

そして、尙も珠數つまぐりつつ禮拜してゐるのだつた。

私は、この佛像を、久しく大切に保存してゐたが、女史の愛國婦人會引退後に、考ふる所あつて會へ寄贈した。本部では、引續いて今でもこれを安置してゐる。

十一月一日——

九段借行社で、愛國婦人會の旺んな巡回慰問報告が開催された時、五百子は、いつものあの熱辯でつぶさに、慰問、視察の状況を語つて一座を深い感激の中に、引きつり込んだ。その時の講演速記は左の通りである。

「今日は、各職員方の御前におきまして、滿韓慰問の御報告を申上ぐるのは、眞に私の光榮とするところであります。しかしながら今回の戦ひたる、開闢以來未曾有の出来事だけあつて、その慘状等の眞相は、逆も言語に盡すことは出来ませぬ。依つてその萬分の一を御報告申上ぐるに過ぎませぬ。どうか御諒察を願います。

私共が皆様方に歡送され、東京を出發致しましたのは、六月二十七日でありました。神戸まで汽車で参り、神戸より御用船河内丸に乗りまして、大連の方へ向つたのでございます。船は段々玄海灘へと差しかかり、かの常陸丸が沈没致しました沖の島の方へ向ひました。御承知の通り海軍はちつとも跡方がございませぬ。ここも今は平和の海となつてをりますが、ああここで常陸丸はやられたか、如何に將校下士卒が、無限の涙を呑んで、海底の藻屑となつたか。思ひ出せば、もう胸は打ち潰れ、眼は眩んで咫尺を辯じない。そこで各々甲板上に立ち、讀經回向して、曾て岩佐評議員より、御供養の爲めにと御頼みになつた、地藏尊像の刷り物を、一行



に分與し、念佛を三唱して、海の上へ流して、其の亡靈を弔ひました。それから船中無事で愈々大連へ着きましたのは、七月七日でございます。私は、さあこれから、艱難をせねばならぬいと一行に申し渡しておきましたが、豈計らん、彼の有名なる大棧橋へ上りますと、立派な馬車が三臺迎へに来て居ました。——これはどうしたんだ——と、出迎への將校達に問へば——まあ御乗り下さい、これは露國の土産です——と。それから、私始め一行これに分乗致しまして大連市中を蹴り立て、元の軍政署へ着きました。ここが我々一行の宿であります。ここは露國將校の官舎であるから、中々立派である。着後早々司令官や、民政官と打ち合せを致しまして、翌朝は兎に角大連の病院を慰問致し、それから墓参をするといふ事にきめました。然るに當日は少し不快でしたから、一日靜養致し、その翌日に、青泥窪アムニツカの病院を慰問しましたが、中々澤山な負傷兵が呻吟してゐました、それから病院長の案内をうけて、將校下士卒の亡靈を祀つてある御靈屋に参りました。此處には、戦病死者の姓名を書き記し佛前に安置し、香華を手向け、尙黒札に白字もて——死者に仕ふる生者に仕ふるが如くせよ——との訓示を掲げ、毎朝毎夕怠らず供養してありました。例の如く、私は、讀經回向をしましたが、案内をされた方々も、共に、涙に袖をしほられました。それから今度は、墓場の方へ参りましたが、一面寂寥た

る緒山、ただ戦病死者の墓標が、二本あるばかり、一方には千四百四十四人、一方には六百六十餘名の遺骨を、合葬してありました。丁寧テイネンに墓参をなし、歸途、大連市中露西亞街の模様を見て歸宿。その夜は、北公園に兵士を集めて慰問の演説をしましたが、會長殿よりの慰問状を讀み上ぐる時は、將校始め兵卒に至るまで、皆感涙に咽びました。その翌日より旅順の方へ向ひ、總てを視察致しましたが、只もう驚くより外はないので、如何に露國は莫大の金を費してこの要塞を固めたか。實に今回の戦争、殊にこの旅順に於いては、長き日子と多大の犠牲を拂つたのであるが、實にその實際を目撃しては、豫想以上の悲惨を現はしてゐます。我々は重村工兵少尉の案内で、松樹山、二龍山、二百三高地、東鷄冠山、北砲臺、黄金山等と順次廻りましたが、何處何處も、天然の要害に、搗てて加へて人工の妙を施してあるのですから、一朝一夕には落ちる譯ではない。先づ簡單にお話を致しますが、あの有名な鐵條網——その端切れをあそこへ陳列して置きましたが——あの鐵線が、まるつきり蜘蛛の網をかけたやうに張りつめ而も、それは皆電流を通したのですから、決死隊がズンズン進んで、これを切断仕様とすれば電氣にうたれ死んでしまふ。それにあの、一分間に六百發も、恰も如露で水を注ぐやうに連發する機關砲で撃ち殺されるのですから、實に悲惨な事は、到底想像の出来るものではない。そ

れから又、向ふには、鹿柴——これは根もとは直径七寸ばかり、長さ一間半も二間もあつて、枝の繁い木であるが、その枝の先を、劍のやうに尖がらしてある。それを到る處、二重にも三重にも積み上げて置いてあるのですから、中々進む事は出来ない。それを勇敢なる我が兵が、君國の爲めにこれらを物ともせず、ズンズン切りつ拂ひつゝ、命を捧げて働いてくれたのであると思へば、只涙をもつて感謝する外はありませぬ。それにあの狼狽——深さは一丈餘ある、その數の多いこと、丁度染物屋の藍甕をならべたやうで、戦争の最中は其の中へ、ピカピカ光る劍を植ゑ込み、また釘のやうな物や、その他少しでも障害になるやうな物をば、どつさり入れてあつたのだから、若し踏み落ちたら、それこそ芋刺しになつてしまふ。それから穹窿と申せば、人造石やセメントにて築き上げた石の室で、その正面に大なる入口があり、側面には小さな窓が幾つもある。戦ひの時にスツカリ其の中に身を固め、鐵の車戸をしめ、その窓より撃ち出すのです。實にその内部の構造に至つても、中々大變なものなんです。その他敵の堡壘壕は數知れぬ。それにあの土囊でございます。——向ふに陳列して置きましたが。——彼の國の婦人は、各自の家に作つた穴藏の中で、あの通り、いろいろの布をはぎ合はして、どンドン拵へて送つたさうです。御見受け通り、更紗もあれば木綿もあり、羅紗もある。一時に旅順の

山には、盛装した婦人が居るが如く、赤、白、黄、紫といろいろ彩つた土囊があつたさうで、それは壁掛けよし、テーブル掛けよし、敷物よしと、手當り次第に作つたのです。露國も随分土囊には窮したものです。彼我の土囊に血痕の染みたる、又慘酷にも肉片などが附着してゐる澤山に積み上げた土囊の、見るも物凄くヒツクリ返つてゐる様、名狀出来ない。丁度この副防禦工事ばかりを見ても、如何に苦戦をしたかは想像出来る事で、犠牲となられた方々に對しては深く同情をよせなければならぬ。とにかくこの地方一面、滿洲へかけては、樹木もなければ清水もない見渡す限りの赭山に、わが兵が坑道作業をやつて、まるで山は鉢巻をしたやうに掘つてある有様、その困難の度一層深く感ぜられました。殊に二龍山の砲臺を攻め陥すには、多大の日子を費したもので、堡壘の爆破をやつた時なども、地形の關係上地雷が手前に爆破したものであるから、見る見る中に三百二十人程は生き埋めになつて、中には手を一本出し或ひは首丈を出し、又は足を一本地上に露はして、半死半生といふ、眞に此の世からなる地獄の責苦も斯くやと思ふばかりであつたさうですが、その時續いて駆つけた後續部隊が、この光景を見て助けようと思ふれば、攻撃の機を逸するものですから、終天の恨みをのみ無念ながら、顧みずして一舉敵壘を屑つたと云ふ、實に凄惨なる事實があつたさうです。又激戰場たる二百三高地

あそこも大變なものです。もし此處を占領する事が出来なければ、港内の軍艦も一撃の下に沈没させることは出来ないのですから。私も毎日々々の山登りで、身體も餘程疲れてをりました。が、手島に手を組ませ富樫に後押しさせて頂上まで登り、二本の太き墓標を初め、遙かに立てる七師團の墓標、さては四方ぐるぐる廻つて林の如くにある墓標へ、讀經回向致しました。それにあの黄金山の砲臺の如きは、極めて狹隘なる港口を控制して、低砲臺と高砲臺とがありますが、これら威力熾盛なる大砲の危害を潜りぬけて、三回までも閉塞の任務を遂行した、我が海軍の壯舉に至つては、實に膽を寒からしめます。閉塞に使用した老朽船は、彼處此處に沈没してをり、又港内に沈んでゐる敵の戦闘巡洋艦も澤山見えまして、且つ浮上りたる船には残らず初乗りをしました。實に此の修羅場に臨みては、眞に大和魂の發揮を十分知る事が出来ます。右は戦場の一端ですが、尙ロシアが如何に贅澤に、如何に横柄にしてゐたかと云ふ事は彼等の官舎などを見ても直ぐに分る。吾々の宿舎はベラシヨーフの宅でしたが、その建築の宏壯なるその裝飾の美麗なる、ただ驚歎の外はありません。私共は五日間旅順に滞在し、墓參に慰問に務め、それより汽車で新戰場を通り、停車毎に麥湯の接待を受け、遼陽へ着、直ちに兵站部に至り司令長官に面接慰問し、或ひは首山堡に、シヤオンヤンズイに戦死者を弔ひ、道路の險

惡なるを見ては、實に輜重輸卒の勞苦を思はれ、晝は墓參に夜は慰問演説に務めました。それから奉天の方へ赴き、三宅少尉の案内で、彼の有名なる激戰場三軒家に忠魂を弔ひ、滿洲軍司令部に至り大山元帥以下の將校を始め、下士卒一般に對し慰問を了へ、或ひは病院に傷病兵を見舞ひ、寧日なく務めました。殊に奉天では福島中將の案内にて、當地へ二十年間在任し今回の戦争にも、我が負傷兵を救護せられた、英國の醫師を訪ひ謝辭を述べ、それより愛親覺羅の廟、奉天宮殿等を見物致しました。自分は第一線まで進みたい豫定でしたが、丁度その頃山縣元帥が此處に見えた頃で、到底花々しい戦争もないから、ここ限りで止めとのこと。残念ながら奉天迄とし、それより元の道へと引き返し、七月二十六日、營口へ着、瀨川領事の出迎へを受け領事館に投宿しました。二十八九の兩日は、該地にて講演を催しましたが、兩日も非常な盛會で、入會者も澤山出来、又寄附金も多く得ました。

三十日營口を出發致し、翌午前十一時三十分、大連停車場へ着。私は富樫を伴ひて元の軍政署へ宿泊し、他の三人は丹後丸に便乗歸朝させました。八月一日大連を出發しまして、小蒸汽で鴨綠江を航し安東縣へ向ひました。途中危難に出逢ひ、到着の日時後れ、辛うじて三日に着きました。直ちに司令官の案内を受けまして、七道溝に病死者の墓參を致しました。夜は軍事

俱樂部で將校の催しに係る晩餐會に臨みました。五日には同所で、支那人の爲めに演説を催し齋藤司令官の斡旋、大原大佐等の盡力で多くの寄附金もあり、殊に王化成は銀票一萬兩を寄附しました。この日より十二日迄は、或ひは知憲の宅を訪問し、或ひは九連城へ墓參し、或ひは病院を慰問して常の如く務めました。十三日に安東縣を辭し、第三長柄丸で龍岩浦に參りそれから本船琴平丸に乗り移り、大同江を渡つて翌日鎮南浦へ着、染谷領事始め多數の出迎ひ人に擁されて、上陸直ちに領事館へ參りました。この日午後四時から、本願寺で軍隊の慰問演説を致し、その翌日は一般の演説會を開き、十六日に京城へ赴きまして、長谷川大將始め公使館、吉海軍田少佐、本願寺等を訪問しました。京城では非常に下痢を致しまして、身體餘程疲勞しましたが、服薬しつつ二十八日京城を出立、十二時頃仁川に着きました。直ちに兵站司令部に參りまして、慰問と演説會の打合せを致しました。三十日には、新井少將の浮揚せられたワリヤーク號へ參り、艦内残る限なく熟覽し、同少將の一方ならぬ御慰勞を受けて、歸宿致しました翌日は日本公園内で、ワリヤーク號引揚げと、樺太占領祝賀會が催されたが、招きに應じて參會し、その翌日から九月八日まで、毎日そこで演説會を開き、九日に出發の豫定でしたが、非常の降雨の爲め、汽車汽船全く不通となりましたから、止むを得ず十一日迄滞在しまし

た。

十二日に愈々仁川出發、大邱へ着きました。翌日守備隊を慰問致し、それから釜山へ歸り、十四日より十八日まで、同所にて軍隊の慰問、本會の主旨演説に務め、十九日に馬山浦へ赴き二十一日迄常の如く勤め、二十二日に鎮海灣に入り、再び馬山浦へ歸り、翌日同所を出發大邱へ着きまして、或ひは韓人の設立に係る養蠶學校をも一覽し、又は觀察使朱氏の宣化堂に於いて講話會を開き會員の募集につとめ、二十六日大邱を發して釜山へ歸りました。二十八日は釜山門司連絡船豊岐丸に乗じ、澤山のの人に送られて釜山を出帆、二十九日無事歸朝致しました。以上は私の視察致しました概要に過ぎませぬ。兎に角今回滿韓を巡視し、悲惨なる戰場、軍人の苦勞、内地人の一致に對しては無量の感にうたれ、益々我が邦人の愛國心を發揮し國力發展に努めなければならぬ重き責任あるを悟り、殊に將來我が國の婦人が、大々の決心をもつて奮闘的献身的生活をなし、大いに我が國力を發展せしめ、殊に本會は今後益々發展せしめてその目的を貫徹しなければならぬと云ふ事は、我が腦裡に一層印象を強く致しました。どうぞ皆様方へ將來一層御精勵の上、國力の充實に御つとめになり、大國民たる品性をして、缺けたる事のないやうに、十分御働きを御願ひ致します」

## 結 び (二)

五百子が、滿韓巡回慰問報告をして、まだ一年とは経たない頃だつた。

突如五百子の愛國婦人會引退は傳へられた。そして、三十九年七月十七日には、その送別會が矢張九段の偕行社で催されたのである。全く事情の分らない人には、電光石火の隠退だ。

しかし、それには充分のわけがあつた。第一は、五百子の健康が許さなかつた事だが、それにしても、これほど會の爲めに身をもつて事に當つて來た五百子が、かうも早く引退して終ふとは、周圍の等しく瞠目に價する事ではなければならぬ。それは何といつても、五百子の無慾恬談、公平無私の性格から來た事であつた。

——會員は既に八十萬に垂んとしてゐる。而も北清事變以來前後三度にもわたつて、女の身で皇軍の慰問、戦没勇士の弔慰、その遺家族救護等といふ會の大使命は充分に果してゐるのだ。然して、會の礎石は盤石だ。そして身は早や六十二歳の老體なのだ。

五百子が、思ひきりよく、これを申し出た事については、會と命を共にして來た當の御本人が其の氣になつてゐるのだから、何人もこれを阻止抑制する術はなかつた。

この日——

百數十名もの本部支部の役員を始めとして、島田三郎氏、伊東海軍大將、谷干城中將、福島安正中將、長岡外史中將、堀内文次郎大佐等多數の名士名將が、來賓として列席された。私も列席した。

肌寒い晩秋ではあつたが、おだやから日の午後であつた。

会場内は、正面には愛國婦人會總裁殿下を始め、高貴の方三四方の御椅子が用意されてゐた。

間もなく、もう宮殿下が御台臨にならうといふ頃だつた。フロックコートの島田三郎氏が、一寸心配さうに私へ言はれた。

「奥村さんは、まだ見えませんねえ」

女史は、別室で身體を休めてゐたのだ。それを私が答へようと思つてゐる間に、早くも下田歌子女史が耳にして、島田氏の方へ、

「大分御疲れのやうですから、別室で御休み願つてをります」と、さういつた。

それに續いて、近衛公未亡人が、

「只今御召替でございました。皆様と御別れをする一生の思ひ出です。記念の姿をお目にかけて、久しく御記憶を頂きたいと、申しでてございます」

と、靜かに、かう付け加へるやうに言はれた。すると福島中將が、稍々不審な調子で、

「記念の姿といふのは——」

と、近衛公未亡人にいふ。

「伊東大將が御贈りの白羽二重の御召物、小笠原子爵の御贈物の懐劍、それから亡くなりました主人の御贈りした、打かけなど、それぞれこれを召して、罷出でたいと申しでてございました」

それから、谷干城中將や伊東大將、長岡中將、堀内大佐等の、女史に關するいろいろな思ひ出に花が咲きかけてゐるところへ、一隅の貴婦人の間で、

「御台臨です——」

との聲がした。一同は起立最敬禮した。

次いで、靜に席に着いた五百子は、思ひなしか一段と立派に見えた。永い間の無理で随分衰弱してゐた筈なのに、その面ざしにも疲労など少しも見えず、晴々としてゐた。

近衛公の今は記念品ともなつて終つた、その贈物の打ちかけは、燃ゆるやうな緋色に金色燦然たる菊模様である。流石に由緒深い品だと思はれた。そこへ伊東大將の贈物である純白な羽二重の袷である。實に鮮やかな姿であつた。おかげで私の贈つた懐劍までが、光りかがやいてゐる氣がして嬉しくさへ思つた位だ。

五百子は、ちつと頭が下つたままだ。珠數が、その瘠せた手首にかかつてゐて、その珠數の房も、思ひなしか、けふは心あるものの如く、靜肅に垂れ下つてゐる風情であつた。

式が進んで、送別の辭を讀み上げてゐる會長岩倉公夫人の聲も、段々曇つていつた。

「我が會の首唱者たる、奥村五百子刀自は、病を養ふため、暫らく、郷里唐津に、歸臥せられんとするに際し、一言慰勞の辭を、呈せんとす。抑も本會の起源は、明治三十二年、刀自が、北清事變に於ける、軍隊慰問の際に兆し、戦場の慘憺たる光景を實見し、皇國の御楯殖るる人の遺族を救助するは、巾幗社會に於いて、爲すべき、慈善的の一大任務なりと觀取し、歸來同胞

姉妹に訴ふるに、願へば、君達が半襟一かけの用を節約、其の資を積み、之に充てよ、と唱道盡力せられたるに起り、三十四年二月、本會を組織してより、以來刀自は、本會の發達にとめ、東奔西走席温まるに暇なく、炎天身を焼くが如き夏の日も、寒冷指を落すが如き冬の日も、遊説勸誘につとめ、日露の役には、奮然として、老體を起し、遠く滿洲の地に渡り、戦地の實況を視察し、軍隊の勞苦を慰問し歸られたり。今日我が會の盛況を來し、着々、その功を奏するものある所以は、一に、刀自の熱誠なる、盡力に待つ處多大なりと言ふべし。今や尙一步を進めて、本會の大擴張を計らんとするに當り、刀自宿年の病未だ治せず、醫師の勸告に従ひ、靜かに郷里に歸り、病を養はん事を請はる。本會の爲めには惜しむべきの至りなれど、強いて、刀自の病軀を煩はすは、久子等の忍ぶ能はざる處、乃ち刀自の請ひを容れ、靜養を勸む。刀自それ、安念靜養せられよ。茲に一言を述べて、刀自の勞を謝し、併せてその歸郷を送る」

読み去り読み來るにつれて、聲の濡れていく會長である。すすり泣いて聞いてゐる人もあつた。立つたまま読み了るまで、ちつとうなだれてゐた五百子……岩倉夫人が座に退くと同時に突

然半巾を顔にあててしまつた。

「高貴の御前に、……有難い。このまま死んでも、五百子は眞に、しあはせも。幸福者でございます」  
一座がシンとした。五百子は涙の顔を上げると、恭々しく上の方へ御禮を申上げた後、

「ありがたう——ありがたう」

と、左右を見かへるのだつた。

やがて五百子はうやくしく拜をなし、

「一生の思ひ出に拙き舞を一さし、御覽に入れたうございます」

と、靜かに立ち上つた。

扇は日の丸だ。これは、五百子が滿洲や支那へ携へて行つた矢張り、思ひ出深い黒骨の軍扇である。

金糸かがやく緋の打ちかけに、雪を敷く白羽二重の衣——それに、この日の丸の軍扇を、サツと開いて、音吐朗々。

「功成り、名とけて……」

と、謡曲「船辨慶」の一節を謡ひつつ舞ひ始めたのだつた。

その手の動き、足の運び——床をこる白足袋は雪のやう、病める顔が、一層寂然悲壯の氣骨を漂はしてゐた。その總てがクツキリと鮮やか過ぎるほど晴れやかな中にも、靜謐な場の空氣に映えてゐた。

やがて舞ひ終つて、再び上座に平伏した五百子の目には、露の玉が輝いてゐた。

### 結 び (三)

五百子は、一旦郷里唐津に退穩したが、病氣の経過が思ふやうになかつたので、明治四十年一月十六日、長男勢一と富樫眞喜子を連れて唐津を發ち、途中佐賀縣知事香川氏を訪づれ、二十日京都に着俵屋旅館に入つたが、その夜惡寒を催し、翌朝、京都大學病院の高山博士の診察を請ふた。

博士の診断は、氣管支加答兒で、容態は大變悪いといふ、で直ぐ大學病院に入院した。間もなく勢一は勤務先から電報があり、後事を高山博士に托すと、早々大連へ引擧げた。

入院後、發熱、喀痰があつて、醫師の手當も看護も充分だつたが、病勢は次第に募つていつた。

そして、二月一日頃から、又頓に快方を見せ、五日には大阪の廣岡淺子、神戸の帆足三郎等の見舞ひがあり、終日機嫌がよかつた。食慾も進み、その日は、飴湯に鶏卵の入つたのに舌鼓を打つて、身體も拭き清めたりしてゐた。



が、それなのに、午後、看護婦に指の爪をとらせてゐて、それが八本目になつた時、急に眞つ蒼になつて、

「ここが痛い——」  
と胸を指した。

そして、急を聞いて醫師の駆けつけた時には、もう非常な重態に陥つてゐたのだつた。

注射などで、一時気分も引き返したが、四時頃からは更に險悪となつて終つた。しかし、意識はまだハッキリしたものがあつたので、急報によつて大阪から飛んで來た二女の光子や、廣岡淺子など枕邊の人々に、五百子は永別の表情をみせると、絶えず、それから、片手を胸に置いて合掌の形をとり、口の中では、いつも念佛を唱へてゐたといふ。

が、遂に、午後八時——

「廣岡さん、あなたの聲が、もう聞えなくなつた——」

さういふと、間もなく息をひきとつたとの事である。

この日午後三時頃——

危篤の電報を受けとつた愛國婦人會本部では、急に各役員に電報電話で通知してゐるところ

へ、又々京都から危篤を報じて來たのだ。代表者は早速、京都へ駆けつけるなど全く上を下への大騒ぎを演じた。

當時廣岡氏は、人にかう語つたさうだ。

「危篤といふ電報で、直ぐ参りましたが、容態が急變してをりました。私が、もう何事も考へずに、御念佛を唱へてゐなさいと、いふと、それは分つたやうでした。丁度正午でした。それから夜の八時過迄は、気分は確かで、いろいろと話も出てゐましたけれど——もう、廣岡さんのいふ事が、聞えなくなつたから、死ぬであらう——と、さういひました。私は再び、靜かに念佛してゐなさいと、申しますと、頷いて、そして、少し靜かになつたかと思ふと、もう亡くなつてゐたのです。實に立派な往生でした——」

明治四十年二月四日——

戰國時代に生るべき筈だつたやうな此の一代の女傑、奥村五百子も、かくして、たうとうその大往生を遂げたのだ。

遺骸を取圍いた人々も、また各々に感慨の無量なるものがあつたに違ひない。

當時、大谷光演師が、私へ寄せられた手紙の一節を左に掲げるが、實際五百子らしい大往生

だつたといふ事が分る。

(前文省略) 佛間に至り合掌して後歸山致候、此の刹那の感慨筆紙には盡し難く、母に別る時は斯くの如き事ならむと存候。遺骸に寄り添ひ顔貌をつくづく見候ひしに、苦痛の跡更に見えず、兩眼を閉ぢ義齒を取りはづしたる爲めに柔和なる顔に相成居候。噫、口角泡沫を飛ばし國家を論ずる時、眼中人爵なく所謂鬚髭の男子を壓倒し來る底の烈女も、早や已に天下に無在。今は平和の國に去つて永代の寂靜を樂しむならむと暫時眺め入り、肺肝より瀝ぐ一掬の涙を以つて告別し、復座讀經致候。

五百子の計に接して京都に參集した愛國婦人會の幹部達は、葬儀の神式を主張するものと佛式を固説するものとの二派になつて、徹宵意見を闘はしたが、結局、廣岡氏が遺言尊重を提唱して、佛式で愛國婦人會葬と決定し、東本願寺に依頼する事となつた。

葬儀は二月十日午後一時、愛國婦人會京都支部を出棺して、東本願寺大學寮の葬場に至り、泉祐義導師以下三十餘僧のいとも莊重な勤行が了ると、會長岩倉久子氏の弔詞を清浦鍊子氏が代讀した。

(前文省略) その病革るや、宗關に聞え、特旨を以つて正七位に叙せらる。巾幗の人にし

て此の恩典に浴す。嗚呼亦偉なり。茲に總裁殿下の台聞に達し謹んで弔詞を呈す。

この一節は、實に五百子でなければ受けられぬ光榮であつて、弔詞は惻々として會衆の胸を打つた。

この日、弔辭弔電は文字通り山積し、會葬者は全國各支部の代表者を始めとして、實に千二百餘名に達した。

長男勢一氏は大連から駈けつけ、やつと火葬場に送る途中で追ひ着いたため、幸ひ遺骸がまだ火葬に附せられてない前に、親子の最後の對面を果たしたといふ。

そして、十三日朝、勢一氏始め遺族一同が、東大谷の納骨堂に遺骨を納め、又遺言通り、東京と唐津にも分骨して納骨したのであつた。

(終り)

講

演

小笠原長生

### 奥村五百子女史を憶ふ

愛國婦人會の産の母なる奥村五百子女史は、近世——と申すよりも、古來の我歴史上に於て最も異彩を放てる、女性の一人でありまして、例へばジャンヌ・ダルクの勇氣と、ナイチンゲールの慈愛とを兼備しそれを日本魂の飾にかけたやうな方でございます。

殊に興味深いのは、ジャンヌ・ダルクは十八歳で強敵イギリスの精銳を挫いて國難を救つたのでありますが、奥村女史が始めて勤王の爲敢然として起つたのも又十八歳の時で即ち文久二年三條實美朝臣以下の七卿が長州に落ちられたのを動機としてゐるのであります。女史の一生を通じて、最高潮の場面たる長州乗込みの一件は實に其の翌年の出來事でございます。花も恥らふ十九の乙女が、深網笠に面體を包んで義經袴を穿き、朱鞘の大小を手挟んで荒くれ男の群ゐる中へ悠々と乗込み、秋野の篠と取圍んだる拔身の槍を尻目に向け、

「高杉殿に御意を得ませうと」一言云ふて微笑んだなどはどうしても女丈夫たる事を裏書きせ

すには置きますまい。更に又ジャンヌ・ダルクも、ナイチンゲールも、頗る信念堅固でありまして、神に對して、絶體の信仰を捧げ、如何に切羽詰つた場合でも、祈禱禮拜を怠らなかつたと傳へられて居りますが、奥村女史も亦、之れに優るとも劣らぬ程の信仰家で、「如來様は何時にも私と共にゐて、何處で死んでもお引取り下さるのだから本當に安心なものです」と、さもさも嬉しうに、眼を細めて語られた事は、幾十遍あつたか解らぬ程であります。

彼の愛國婦人會を起す動機となつた北清事變視察の際、北京方面より郷里唐津の家族に宛てた手紙を見ると、如何に其の信仰の深かつたか、首肯されると共に、其の覺悟の程も推されたのでありますから、一通り讀上げてみませう。

一筆申し進じ候、國元一同御機嫌能御揃ひ被成萬々目出度申納めまらせ候、次に私も京城迄御用にて参り候處、急に清國、天津、北京迄御用向、明日中北京へ着致候、今日迄無事御安心被下度、浮世とは申しながら、實に筆にも言葉にも盡し難し、

あはれさを云ひつくさんと思へども

涙こぼれて袖ぬれにける

天津より北京迄三十四五里の處、實に申進じやうも無御座誠に誠にあはれ〜〜諸君

國家忘るべからず、歸國の上積る御物語可仕候。

御佛前への御花何卒御頼申候、先は右申進じ度あら〜目出度かしく。

十月十九日

奥村 五百

斯様な場合の手紙にも「御佛前への御花何とぞ頼申候」と認めてゐるのを見ても、其の信仰の如何に篤かつたか、解るではございませぬか。女史は常に、

「信仰のない智慧は、奸智に陥るの恐れがあるし、信仰のない勇氣は粗暴に流れ易い。されば信仰が基とならねば、眞の智慧も勇氣も出るものではない」と云ふて居りましたし、又「男は少し許りの智識や學問があると直ぐにそれを鼻にかけて信仰を輕蔑したりする者が多い。それだから御覽なさい。やゝもすると分に過ぎた名利や財産に執着して、我知らず罪惡を犯すやうになりもする。そこに至ると女子の方が、どれ程眞面目だか解らない。私は女子に生れさして下さつた事を、何時も如來さまにお禮申上げて居ります」と心から女子である事を光榮として居りました。言稍奇矯に過ぐるの感があるかも知じませんが、私はしみじみ其の言葉を味あはされるのでございます。實に女史の言行を仔細に觀察して見ますと、其の勇氣も、慈悲も皆照々火の如き信仰より發して居りますので、女史の研究家に取りて、之れが最大切な着眼點かと

存じます。

霞む野にふみ分けゆくや法の道

と口誦さみつゝ、左手に珠數をかけ、右手に竹杖を携へ、六十餘歳の老體を草鞋に托して、内地の津々浦々は申すに及ばず、朝鮮滿洲までも押渡り、

「半襟一かけを儉約して、戦死者の遺族を救ひ給へ」

と血の叫びを續けた事が、信仰により一層大なる意義を生じ、さながら佛慈愛の光と輝いたのでございます。

以上は専ら奥村女史の信仰について申上げたのでありますが、其他女史には更に二つの特色があつて、何時も其の事業を成功に導いたやうに思はれます。

其の一は、女史が頗る機智に富んで、如何なる場合に於ても機會を取逃がさなかつた事であります。それに就いて先づ私自身が實驗した事から申してみませう。

私は海軍兵學校を卒業してから間もない明治二十二年、久々で郷里唐津に歸りました。處が面會を望まれる方が多數でありましたので、一々座敷に通して面會すると云ふ譯に参りませんので、日を期して庭園で面會する。

謂はゞ一種の園遊會みたやうな形式を取る事に致しました。其の當日集られた方は數千人の多きに上り、雑沓を極めました。其の中に粹な服装をした一人の婦人が鬼の面を被り、赤い襷を斜にかけて三味線を抱へ、白足袋に麻裏草履と云ふ身仕度で、美しく着飾つた年頃の娘四五人を引連れ、流行唄を唄ひながら娘達に踊らせ、「あゝこりやく」と身振り可笑しく拍子をとりながら私の立つてゐる前にさしかゝりましたが、突然假面を取ると私に向ひ、

「妾は奥村五百と申すもので、實は色々お耳に入りたい事がございませぬので、お着きになつてから度々伺ひましたが、いつも玄關拂ひで取次いでくれるものがございませぬから、據ん所なく斯様な眞似をして参りました。どうか御面會をお許し下さいませ」

と申しました。私は其の以前より知人達から、奥村五百と云ふ女壯士が居て何事にも喧しく口出しして始末に困つてゐる。若し其の女が面會を強請して何か云ふても取合はないやうにしてくれ、との注意を受けて居りましたが、只今面會してみると、如何にも眞剣味が溢れてゐてゆるゆる談話がしてみたくありません。

さうして遂ひに親しく交際するやうになつたのでありまして、初對面から其の奇抜さに愕かされたものであります。後年女史が支那を視察した際などには、彼の大官連と面接するに當り

白綸子の衣服に緋の打かけを着、錦の袋に入れた小刀を手挟んだ物々しい服装で堂々と應對して、相手を烟に巻いた事も屢々あつたのであります。

又斯う云ふ痛快な話もございます。

義侠の將軍として、勇名を轟かした八代六郎大將がまだ中佐で、軍艦官古の艦長をしてゐた明治三十三年の六月、同艦は朝鮮釜山港に碇泊して居りましたが、同月下旬内地に歸らうとして今正に錨を抜かんとしつゝありました。するとそこへ一人の婦人が舳に乗つて馳せ着けて、八代艦長に面會を求めたのであります。

そこで艦長が會うてみますと、豫て懇意にしてゐる奥村女史であつたので、どう云ふ用向きで訪ねられたか尋ねてみますと、女史の答へに内地まで乗せて行つてくれと云ふ事でありました。そこで八代艦長は如何に懇意の間柄でもそれは困ると断りました。と女史は一通の書面を取出して是れでも乗せて下さる事は出来ませんかと八代艦長につきつたのでございます。艦長が開いてみますと、それは時の軍令部長伊東大將から、清韓兩國滞在の艦長にあてたもので其の文意は此書面を持參の奥村と云ふ婦人は、國家の爲め、一身を捧げて盡力をしてゐるものであるから、便乗を願ひ出た節は許可されたいと云ふのであります。

其處で流石の八代艦長も呆氣に取られて、是れは驚いた、全體君は何時の間にこんなものを貰つたのだ。だがこれさへあれば百人力だ。よし此儘乗せて行かうと、女史は直ちに軍艦便乗者となつて、大威張りで艦長室に納まつたのであります。さうして此の航海中八代艦長の許可を得て乗組の將校兵士を集めて感謝の意を表すると共に、契つて軍人をして後顧の憂ひなからしめると、熱誠溢れる演説をしたのであります。是れが女史の愛國婦人會の趣旨を軍人に向つて述べた最初のもので、同會にとりましては忘れる事の出来ないものでございませう。それは兎に角として、軍令部長から斯様な手紙を貰つたのは、女ばかりではございませぬ、男子としましても前後たゞ奥村女史一人なので、これも女史が機會を掴むに妙を得てゐた現れの一つなのでございませう。

そこで今一つ特色を申しますと、それは女史が極端に無慾であつたと云ふ一事であります。そもく此の無慾は、此の鏡に對しては磨粉のやうなもので、慾の爲に誘惑することがなければ、此の鏡は何時も光々と輝いて、總ての事物はありのままに寫るから従つて自分の進退に關しても判断を誤らないやうになるのでありませう。即ち進むべきに當つては所謂、斷じて敢行すれば鬼神も避ける底の意氣を持ち得ると共に、退く時機だと感ずれば、如何に自分の骨折つ

て守り立てた事業でも少しの未練氣もなく勇退し得るのでございます。私が女史に最も敬服してゐるのは此點なのであります。一體人物を観察するには、其人の出所進退を見ることが必要であります。就中、進む時よりも、退く時の態度を調べるのが大切のやうに思はれます。

と申しますのは、進む時と云ふものは、何れ順潮に乗つた際なのでありますから、存外其人自身に餘祐も出来て参りまして、智慧も其の持前の智慧よりも、一層働が見えて来るものであります。又はたから見ると云ふと、得て買ひ被るものであります。だが退かなければならないと云ふ場合になりますと、さう簡單には片付けられないのであります。何んとかして少しでも長く其の位地に止まりたいと、其の當人も思ふから無理をする、又時によつては嘘も吐く甚しいのは七轉八倒、のた打廻つて醜態の限りを暴露しても、まだ未練を残してゐるものが多いやうであります。

餘程優れた人物でなければ弊履を捨てる如しなどゝは存じもよらない。そこへ行きますと奥村女史の愛國婦人會引退の際の立派さ、尤も、是れは愛國婦人會ばかりではございませんので、其の前、地方的に活動して居りました際、例へば唐津港を特別輸出港にするとか、或ひは唐津鐵道を布くとか、さう云ふやうな時に非常に働いて居つて、而も報酬は少しも求めない。

又進んで、朝鮮に實業學校を建てたり、或ひは支那の風教を視察したり、いろいろな事業をいたしましたけれども、何時も少しも報酬を求めてゐなかつたのであります。併しながら、それは女史の眞に全力を注いだものではなくして、女史がほんたうに力を入れたのは申す迄もなく愛國婦人會なのでございますが、而も其の愛國婦人會を引退する時の態度の見事さ、是れが最も大きな教訓を我々に示されたものと、私は常に感謝してゐる次第であります。

思ひ出しますと丁度明治三十八年の十月下旬の或夜でございました。當時大本營幕僚を仰付かつて居りました私が、大本營に宿直して居りますと、そこへ奥村女史が訪ねて來られて、愛國婦人會も隆々たる勢ひで發展して行くし、又自分のやうなものまで、長くも皇后陛下に内拜謁を承るし、又遙々滿洲に押渡つて出征軍人の慰問も出来たし、最早自分としての御奉公は終つたと思はれる。これから先自分が會に居るのは寧ろ餘計なことになるばかりか、場合に依つては或ひは邪魔になるかも知れない。従つて今が退き時だと自分は考へたが、あなたの御意見はどうであるかとの相談がございました。そこで私も實は心ひそかに考へてゐた折でありましたから、直ぐに大賛成の旨を答へたのであります。是れが世間に誤り傳へられて、私が引退を勧めた様になつて居りますが、私は唯賛意を表したまでなので、進退の決心をされたのは女史



自身なのでございます。さうして翌三十九年九段借行社に於て盛大なる送別會が開かれ、恐れ多くも貴き方々様迄御臨席になられ、女史が國家的活躍の最後の幕は意義深くも閉されたのであります。

「功なり名遂けて身退くは天の道」と金扇を開いて「舟辨慶」の一節を舞ふたことは、女史の心はどんなに高く清らかなものでしたらう。私は今思ひ起しても胸が透く心地が致します。此れは實に此の信仰と奇智と勇氣の三つは永久愛國婦人會の精神となりまして、輝き以て皇國の軍人の後顧の憂ひを斷ち、一意専心其の本分に邁進せしむるものと、私は確信してゐるのであります。こゝに謹みて現に愛國婦人會總裁でお出で遊ばされる、東伏見宮妃殿下より、女史在世中に賜つた御歌を拜誦し、以て此の放送を終る事に致します。

ますらをも及ばざりけり國の爲

心つくして君のまことは

—昭和七年二月七日放送—

### 奥村女史を憶ふ

今日は丁度、此の愛國婦人會の母とも云はれる、奥村五百子女史が逝くなられました、二十七日忌の祥月命日に當るのでございますが、私共は實に感慨無量なのでございます。併し昨年堀内中將がお話を申上げました筈でございますし、其のほかは會長さんからも放送もありましたし、それや是れやで、もう奥村女史の事に就いては、殆んど皆さまは御承知の事と思ふのでございます。唯今申上げますのは、從來、奥村女史の活動方面は能く知られて居りますので、それ以外に此會として、是れだけ大きなものにせしめたのは、唯單に奥村女史の男勝りの女丈夫とか、或ひは女傑と云ふ方面ばかりでなかつたと云ふことを、お話申上げたいと思ふのであります。

只今此時世に於きましては、奥村女史の活躍は、實に目に見えるやうであります。三十三年支那から歸られました、私の所を始めて訪はれた時、丁度私は流行性感冒に罹つて、寢て居つ

たのであります。醫者から絶対に面會を謝絶して靜養しろと云ふ事でありました。

ところが奥村女史が訪ねて來られたのであります。それで宅の者が斷りましたところが、忽ち落雷してしまつたのであります。國家の大事に少し位の熱があつたからと云つて、それで會はないと云ふ事は實に不埒至極である。

と云ふので、まだ其の事を宅の執事が私に通じませんうちに、早くも奥村女史の姿が、私の病室に見へたのであります。さうしてそれは實に熱心なもので、是れが即ち此の愛國婦人會の一番始めの時であつたものでありますから、云はゞ今日、先程總長からお話を伺ひましたが、昨年一年に廿七萬人も會員が増へられたと云ふので、丁度合せて百七十八萬の會員がおありなさるさうであります。

其の會員の出來た根源を尋ねて行くと、此の私の所へ來られて始めて、此の婦人の國家に對する必要、覺悟、それを目醒まさうと云ふ時でありますから、なか／＼勢ひ當るべからずなんで、それはもうどうも、顔中涙にしてしまはれた。私ももう終ひには、なか／＼熱があつて頭痛がしてゐましたけれども、そんな事を云つては押へつけられさうでありますから、そこで約三時間程も、お話をしたのであります。斯う云ふお話は幾らもありますが、今日はそれより

も、むしろ奥村女史の他に長所があつたと云ふ事を申し上げたいと思ふのであります。

それに先立ちまして、奥村女史が豫て理想として仰ぎ奉つて居つた尊い御女性様が御二方あられたのであります。御一方は神功皇后様であります。今御一方は光明皇后様であられたのであります。女史が兩方面を備へて居られたと云ふ事は、煎じつめると、此の御二方様を仰ぎ奉り、御二方様を以て、日本婦人の何んと申しませうか典型と申上げては恐入りますが、代表的の御方様と、奥村女史は考へて居つたやうに思ふのであります。さう申して居りました。此の愛國婦人會を始める前、朝鮮に於て事業を始める前、其のもつと前から、常に口にして居つたのは、神功皇后様と、それから此の光明皇后様の御事であつたのであります。従つて奥村女史をよく分解して見て云ひますと云ふと、此の御二方様に私淑し奉つたと云ふ事がよく分つて來るのであります。不思議な縁と申上げては恐れ入りますが、之れは私は先程、放送でも申し上げましたが、今年丁酉、癸酉に當る。此の神功皇后様が、皇后様にお立ち遊ばされたのが、丁酉癸酉であります。正月に神功皇后様にお立ち遊ばされてから、僅か二月、其の三月には、御承知でもありませうが、九州に熊襲と云ふものが起つて叛亂致しました。それに付いて仲哀天皇様が御親征遊ばされた。其の時天皇様は紀伊にお居でになりましたから、其の紀州から今

の海軍・搦士を率ゐて、瀬戸内海へお乗出しになられまして、さうして馬關にお出で遊ばされました。すると其の時神功皇后様は、越前の敦賀、其の當時も敦賀と申して居りましたが、其處に今日で申しますと御用邸がありましたので、其處にお居でになつてあられたところが、天皇様からの御使ひでありまして、

是れから直ぐ馬關の方へ参るやう、と云ふ御沙汰であつたのであります。そこで御女性様の御身であらせられながら、さうして海軍をお率ひ遊ばして此の日本海を乗切られたのであります。で此の事は、丁度放送の時に申上げましたが、日本の歴史家が、甚だ之れを軽く見てゐる。是れは飛んだ不心得であつて、此の御女性様であらせられて、而も只今から千八百年も昔に、極く幼稚な造船術に依つて造られた船に召されて、さうして海軍をお率ゐになつて、此の浪荒き北海を、即ち日本海をお乗切りになつた事は、世界の海軍史上に於ても、特筆大書すべきものであらうと思ふのであります。

放送の時に、私は申上げましたが、私も明治三十五年頃、千代田と云ふ艦の副長をして居りました、丁度隠岐の國に行つて居りまして、彼處から出發しまして、朝鮮海峡で大演習をやると云ふ事があつた。隠岐の國を丁度出まして、神功皇后様のお乗り遊ばされたと同じ航路を

朝鮮海峡に向つて進んで参りますと、途中で暴風に遇つたのであります。其の當時の千代田は餘り大きな船ではございません。今日の軍艦から較べれば殆んど雛型の様なものではありませんけれども、兎も角三千二百噸と云ふ排水量を持つてゐるのでありますから、長さも五十間程あるのであります。此の千代田を浪が越すのに、横に越すならば餘り不思議はないのでありますけれども、縦に越すのであります。私も色々暴風に遇ひましたけれども、此の暴風は幾度も遇はない暴風でありました。兎に角五十間の艦を縦に浪が越す、浪が越すと云ふよりも或ひは浪の下を潜つて行つたと云ふ方が當るかも知れない位、大きな浪を潜つた、ところが、今より千八百年も前に、幼稚な船に召されて、此の浪を乗切られたと云ふ事は、實に驚くべき歴史だと思ふのであります。

それから續いて例の三韓征伐と云ふ事を行はれたのであります。是れもです、今日の丁度只今の満洲問題にしろ、又上海事變にしろ、あゝ云ふ色々な事件を照合はせて見ましても、如何に此の皇后様の卓見であられたかと云ふ事が拜察されるのであります。それは此の九州に熊襲が非常な勢ひを振つてゐると云ふのは何か後に付きものがあると云ふ事をお考へ遊ばされて、其の結果です。朝鮮の新羅が後楯になつてさうして此れを嗾し掛けて、使嗾してゐると云

ふ事を御承知になられたのでありますから、是れは如何に熊襲を攻めても駄目である。元を突き、根を断つて葉を枯らすと云ふ事をしなければ此の亂は治まらないと、御覽遊ばされたものでありますから、御自ら揖士を率ゐて、三韓征伐と云ふ事が行はれたのであります。此の皇后様の三韓征伐と云ふのは、たゞ單に此の遠征の始めであると云ふばかりでなく、此の御一擧がありました爲に、それからは、數百年の間、朝鮮が我に隸屬して居つたと云ふ事は、全て此の神功皇后様の御威徳に依るところであつたのであります。此の事を私、よく奥村女史に話をし、又さうでなくとも奥村女史は唐津の出身でありますから、神功皇后様に非常に色々な御因縁のある土地でありまして、マツウラ川の鮎をお釣りになつたと云ふので名高い。其の松浦川の近く、其處では眞直ぐな針で魚をお釣り遊ばされたところが、それに懸つて來た魚が鮎でありま

す。誠に珍しい事である。

「メツラ、メツラ」が松浦と云ふ事に訛つて、松浦潟にしたと云ふ話であります。此の他、口碑に傳へられたものが、此の唐津地方では澤山あるのでありますから、其處に生れた奥村女史が、自然に此の皇后様に習ひ奉つて、女子の勇氣と云ふものが必要だと云ふ、斯う云ふ事を考へて來るのは自然の勢ひだと思ふのであります。是れを長く申上げて居りますと、是れだけ

でも、二日や三日のお話をするだけの事はあるのでありますから、それは全て止しまして、唯單に此の奥村女史が、神功皇后様を仰ぎ奉つたと云ふ、又其の他の一面には非常な慈悲と云ふ一面がある。是れは即ち光明皇后様を仰ぎ奉つた結果だと思ふのであります。

御承知の通り、光明皇后様は非常な御信仰家であらせられました。殊に法華經、佛教の方では殆んど中核になつてゐる。佛陀出生の本懐は、法華經を説く爲めだと尊重せられてゐる。其の法華經に非常に歸依遊ばされたので、既に御手づから御寫經をあらせられたものが、今日澤山残つてゐる位で、非常な御信仰家であらせられたのであります。此の御信仰を仰ぎ奉つたと云ふ事が、奥村女史をして如何なる場合、如何なる時に於ても、少しも悪びれず、少しも恐れず、何時も全力を盡して困難に當つて行けたと云ふ事は、此の信仰の力だと思ふのであります。其の信仰の力は何處から習ひ奉つたと云ふと、即ち此の光明皇后様の御事蹟を仰いだものと思ふのであります。これも、是れだけのお話を致しましても優に二度や、三度お話をすることがありますが、これもお預り致しまして、其の他の方面に移つて行きたいと思ひます。それは、私が奥村女史の最も長所であつたと云ふ事は、奥村女史は一つの「ユーモア」に富んでゐた。只さう聞きますと、何んだか奥村女史と云ふと、大臣をやつつけたとか、大將と取つ組み

合つたとか、そんな話ばかりあるやうに傳へられて居るのであります。

曲亭馬琴が、支那の水滸傳を譯したものに、傾城水滸傳と云ふ草双紙があります。今日のお若い方は草双紙などは餘り御覽になりませんが、此の傾城水滸傳と云ふのは、支那に百八人の豪傑が揃つて出來た、それを女に代へて馬琴が作つたものでありますが、それを見ると女豪傑が、もう澤山居るのです。男を十人撲り殺したとか、或ひは大將を五人切つたとか云ふやうな偉いのが、澤山出て來るが、私は今日奥村女史が傳へられてゐるところを聞くと、そゞろに此の傾城水滸傳を思ひ出すのでありますが、どうもそれだけでは、こんな大きな事業が出來る筈がないと、斯う思つて頂きたいと思ふのであります。奥村女史の色々長所の中で、多藝であつたと云ふ事と、何んと申しませうか「ユーモア」に富んで、眞に滑稽味があつたと云ふ事が非常な大事な、奥村女史を研究する上に重要な點で、此處に女史の御子さんが來て居られますが、御子さんと申しましても、五十幾つで此の奥村勢一さん等も、小さい時分には色々滑稽な事に會つてお出でだらうし、叱られておゐでだらうと思ふのであります。

先づ多藝の中から行くと、義太夫を語る、踊り、仕舞をやる、端唄をやる、三味線を弾く、實に多藝な人で、苦しむ時代があまりになりましたが、其の時には三味線を弾かれたり、針を

とつて、お針にもなられたと云ふ位妙域に達して居られる。さう云ふ風に多藝な方でありまして、私の母も、——母と申しましても義母でございますが——奥村女史の義太夫が大好きで、一體、一寸申上げますが、奥村女史の一生は、何處を掴まへてみましても、立派な芝居にもなれば、小説にもなれば、淨瑠璃にも語られると云ふ、一生實に演劇的なところがあります。此の事は又、奥村女史などと、芝居などと云ふものはまるで見ないもののように思はれますが、實は非常に芝居好きなので、九代目團十郎が非常に最良だつた。

丁度今の歌舞伎座が出來まして、餘り日の經たない時だつたと思ひます。櫻痴居士が書き下しまして春日局をやつた事がありますが、大分古い時分の事でありまして、其の頃の役者も皆な死んで、今の六代目とか、吉右衛門とかはまるで小僧の時でありまして、之れは御承知の方も少いと思ふのであります。之れは非常に當つた芝居で、始めて團十郎が春日局をやりまして、それを奥村女史が見に行つたのであります。ところが、春日局の容貌が非常に奥村女史に似て居つて、それを一緒に行つた人が、あなたそっくりだと云つたところが、お婆さんすつかり喜んでしまつて、尤もその時はまだお婆さんではないが、非常に喜んで、翌日私の所へ報告に來たのであります。昨日歌舞伎に行きました處が、團十郎の春日局が私そっくりだと云ふ

ことで、御報告に來ましたと云ふ事でしたが、此の間も梅幸がやりました時にも、非常によく似て居りました。之れも奥村女史によく似てゐる。それで私の國に大島と云ふ銀行の頭取がありました。帝劇を見て吃驚して私の處へ報告にやつて來た。どうも不思議ですな、聲までがそっくりですと云ひました。ところで私は不思議な事を考へた、どうも顔が似て來ると、聲まで似て來るものかしらと思ふ位似て居つた。御當人が芝居が好き、又其の一生涯何處を引つ張つて來ても芝居になると云ふ、さう云ふ御經歷であつたのであります。又時々芝居をやられたものでありますして、芝居をやられると云ふと可笑しいが、事に當ると其の働きを見せますのに芝居的にやられる事がある。

之れは奥村勢一君も極く幼少の頃だと思ひますが、私が奥村女史に始めて會ひました時が、全然演劇的なんで、私が國へ歸りました時に、自分の家に居りますものが、此處には奥村と云ふ女壯士が居りますが——其の時は女壯士と云はれてゐましたが——何か喧しい事を云つて來るかも知れませんが、若し會つても、其の人の云ふ事は取上げて下さいません様にと云ふ事でありました。すると大勢田舎の方を一々座敷に通すと云ふ事は非常に臆劫でありますから、まあ今日の園遊會と云ふ事をやつてさうして門戸開放、誰でも其處へ這入つて來る事が出来る

と云ふやうに、庭の所へ鏡を抜いて杓子を置いて勝手にやれると云ふことでやつて居りますとそこに鬼の面を被つて手拭を首に巻いて、誠にあでやかな揃ひの着物を着まして、三味線を弾いてゐる。其の後に二十前後の若い方が續いて踊りながら私の傍にやつて來る。私はその時庭に立つて居りましたが、其の鬼の面の一組が、スツと私の傍に來ると、スツと面を取つて、私は奥村であります。何時もお目にかゝりたいと思ひますけれども、何時も玄關拂ひを喰つてしまふ、どうも仕方がなくて、かう云ふ事をして來たのであります、どうか私の話を聞いてくれ。それは伺ふけれども此處ではいけない、今私は長崎に居るのだから、長崎に來てくれ、艦に何時でもゐるから、艦に來てくれ、と云ふて別れまして、之れが始めてお目にかゝつた時、是れは頗る演劇的であつたのであります。

其の他話は前に戻りますが、私の母が奥村女史の義太夫が大好きだつた、どうも奥村女史を女義太夫にするのは甚だ失禮ですが、女義太夫、あれは私は甚だ嫌ひです。義太夫は男に限ると思ふ。女は聲が細くて、艶はありますか知れませんが、淨瑠璃の本領を發揮する事は出來ない。出來ないものと思ふ。それが奥村女史のは錆のある確りした聲で太く、私の母は其の女史

の義太夫に魅せられて居つて、奥村女史がやつて来ますと、捕へて義太夫を語つてくれ、語つてくれと云つた。奥村女史は私と會ひます時はかなり亂暴な會ひ方をしてゐる。先刻話した長崎で始めてお目にかゝつた時も、始めは間を隔てゝ控へて居りましたが、そんな芝居は止めにして此方へ入り給へ、あなたの事はスツカリ聞いても居るし、研究もしてゐる。そんな敷居の向ふで手を着いてお辭儀をする事は止めにして下さい、と云ふてやると、之れは面白いと、ツカ／＼私の鼻と鼻の打突かる程に来て、いきなり跌坐をかいてしまつた。其の時分奥村女史は非常な亂暴な時代であつたのであります。そんな譯で、私と會ふ時はかなり亂暴な會ひ方をした。御承知の方があつたかも知れませんが、杉山平吉と云ふ方がありますが、此の人と一緒になつた。

今日は桃も美味しいのが日本にも出来ませんが、其の當時は水蜜桃程好いものはなかつた。丁度「アメリカ」から来た美味しい桃を十程ばかり出して置いたところが、杉山先生は歸りに貰つて行かうかと思つてゐた。——ところが其處へ奥村女史が這入つて来ると、之れは美味いと云つて皆な食べてしまつた。杉山君は口惜しかつたと見へて、其後も、奥村のお婆さん皆な食べてしまつたと云ふ事——そんな譯で私とはかなり亂暴な會ひ方をして居りましたが、

私の母が出て来ると坐り直してしまふ、そこが女史の偉い所で、實に禮儀正しい事であつて、それで母が引込むと、ヤレ／＼と腋の下の汗なんか拭いたもので、そこで母は奥村女史の義太夫が好きだから、顔さへ見れば義太夫を語つてくれと云ふ、そこで仕方がないものだから、三度に一度はよく義太夫を語つたものであります。

それから斯う云ふ話があります。私の妻が始めて身籠りました時に、女史は朝鮮に居つたんでありますが、其の事を非常に喜んで、朝鮮からワザ／＼出て来た、その出て来る時に、鶴を一羽擔いで来たのであります。さうして鶴を食べると丈夫な子供が出来るさうだから、是非食べて貰ひたい、さうしてそれは鶴を一羽皆な食べてしまはなければならぬと云ふ、それで三度々々鶴を食べさせる、その鶴を皆な食べ終るまで滞在してそれを見極めて歸つたと云ふ譯であります。餘りなその奥村女史の熱誠に感じまして、妻は其の鶴の足を筭に仕立て、今日も大切に持つて居るのであります。其後子供が生れました所が、又朝鮮から出て来て、永く滞在して居りました間で、暇がありますと、私の長女をおぶつてゆる／＼と子守唄を唄つて居りました。其の時には女丈夫とか、女傑とか云ふ傳は全くなりまして、唯一介の年を老つた女中頭と云ふ感じを我々に與へられたのであります。

それからもう一つ「ユーモア」と云ふ事について面白い話があります。それは伊東大將——後に軍令部長になりました、——と云ふ方が、矢張りこの愛國婦人會の組織については、隠れたる功勞者の御一方であつたのであります。此の近衛公爵の事、或ひは岡部子爵の事、又二條公爵の事、又は大谷光演師等の事は、それ／＼皆さま御承知の事と存じますが、此の影に於て非常に力を與へられたのが伊東大將なのであります。殊に今も奥村勢一君と話したのであります。奥村女史に手紙を書いて與へた。

それは滿韓にゐる所の、警備艦の艦長にあてたものであります。尤も是れは愛國婦人會の始まる前で、「此の奥村と云ふ人は國家の爲に働く人であるから、若し便乗を願ひ出た時には然るべく御高配を願ふ」と云ふ手紙なのであります。恐らくは日本に於て、女子ばかりではありません、男子と雖も、時の軍令部長から斯う云ふ手紙を貰つたと云ふ人は他には一人もありません。

それから此の愛國婦人會が出来ます時にも、私は始終近衛公爵の所へ行く。又此の本部の方へ出てお手傳ひをする事を、公然伊東大將は許されたのであります。或る時、近衛公爵が私に斯う云はれた、あなたは私の所へこんなに出遣入りをよく伊東部長は黙つてゐますね。い

や別にそんな事はありませんが、實は堀内がやつて来て、いろ／＼あなたの所へ繁々出入りをするのはいかんと云ふ事を、或陸軍の當局者から注意を受けましたから、餘り繁々と伺へません、と云ふ事であつたが、あなたの方にも實はそんな事はありはしないか、懸念して居つた。と云ふ事でありませう。それは近衛公爵と云ふ方は、御承知の通り一面に於て浪人組の領袖だつた。日露戦争を捲起したのも、與つて餘程近衛公爵のお力があつたらしい、又此東洋と云ふ事については、非常な強固なお考へを持つて居られた方で、従つて或方面からは、何時も敵視されて居つたのであります。でありますものですから、二條公爵がこんな事を云つた、僕はある方面から注意を受けたと云ふ、それは近衛公爵と餘り近しくするなと云ふ、そんな事を私に云はれた位で、そこで、何か私も軍令部長でも注意を與へて、其の爲に役目上迷惑を受けてはいかと思はれてさう仰せられた。ところが私には行くなどころではない。出来るだけ行つて婦人會の事をお助けし、又近衛公爵と色々と打合せをしてさうして、力になつて、あなたもやれと云ふ事を伊東大將に云はれて居つたのであります。

ところで或時、高輪の、今はなくなりましたが、伊東大將の家がありました、それは丁度洋館造りで二階にベランダがあつて、或夏の事でありました、奥村女史と一緒に行つて、色々愛



國婦人會の事や朝鮮の事を話して居る。

其のペランダで伊東大將と、奥村女史と大議論が始つた。私は可笑しくて仕様がなから、是れは傍で見ても思ふた。其の中に何か奥村女史が無暗と喰つて掛つたのです。

その中に「何を云ふ」と伊東大將が——大將は六尺以上もあつて、非常に力の強い方でしたから——奥村女史の襟髪をとると、ペランダからズットと下へ下けて「どうだ〜」。ところが流石に下を見れば二階なんだから、下は石が敷いてありますから「参りました、もう降参しました」と云つた話があるのであります。

かう云ふ隠れた事もありました。それから此の奥村女史が従弟の帆足鐵之助と云ふ人と一緒に來て、愈々日清戦争が迫つた時、私を軍艦に乗せて連れて行つてくれと頼んだ。連れて行つてどうするのだ。愈々戦争となつた時、石炭船を一ツやる、その石炭を積んだ中に爆弾を澤山入れて置く、さうして自分は日本の軍隊に石炭をやるやうな恰好をして、敵の根據地の方へ流れて行きます、さうするときつとそれをとつてその石炭を使ふに相違ありません、すると其の中に入つてゐる爆弾がバツと破裂して向ふの軍艦を破るからやつて下さい。それは駄目だ。昔の戦ひならそんな事も出来るかも知れないが、今の戦ひは敵と味方と、何處にゐるか解らない

位だし、それに其の石炭を取つても炊くかどうか分らん、そんな事は許される筈はない、と云つて斷つた事があるのですが、此の帆足を同道して來たが、私共の艦は出てしまつた後です。何んとかして私に會ひたいと云ふ考へを奥村女史は持つてゐたさうであります。

それは後になりますと、日本の海軍の方が勝つて、あの通りの結果になりましたけれども、その戦ひの前は、陸軍は大丈夫と云ふ保證がついて居たが、海軍は危いと云ふ話であつたのであります。向ふは定遠、鎮遠と云ふ大きな艦がありました、此方にはそれに匹敵する様な艦が一つもない。それです。それから非常な苦心をしました。黄海の戦ひの時も、定遠、鎮遠は一尺二寸も鐵板を張つて居りますから、それで、打突からうと云ふのです。ところが此方の艦はガラ／＼船みたやうなもので、私の乗つて居つた高千穂などは良い艦と云ふので評判でしたが、四分か五分しかない、其の當時打抜かれた鐵板が残つて居りますが、打突かりましたならば、それこそ横綱に揮擔ぎが打突かるやうなもので、向ふは追駈ける、此方は逃げながらに撃つと云ふやうな、非常な苦戦をした位でありますから、奥村女史は私は戦死をするだらう、斯う思つてゐたから、何んとかして一邊會ひたいと云ふので佐世保で會へなかつたものでありますから、直ぐ朝鮮に渡つたものであります。

それで仁川に行つて居りました。仁川は港でありますから、どうかして私に會へるだらうと思つて居つた、所が私の艦は仁川等には入らない。主力艦隊は何處にゐるか解らないやうにして置かないと、水雷の襲撃を受けるとか、今日で云ひますと飛行機で爆弾の投下を受けますから、極く秘密に姿を見せないものですから、奥村女史は失望してしまつて、大連に行くと云ふので私に手紙が來ました。それは交通は開けて居りますから、私の艦に手紙が來ました。見ると大連に渡ると云ふ事が書いてあります。日露戦争の當時は大連に迄行けましたけれども、日清戦争の始めには、大連は落すとも何もしてゐない。其の前に行くのは危険だ、とても會ふことは出来ないからと云ふので無理に止めて京城に居たのであります。其の時に、後に朝鮮で事業を起すと云ふ事の動機がこゝに萌してをつた。

實に縁と云ふものは眞に不思議なもので、よく俗に申します縁なき衆生は度し難しと云つたり、或ひは袖褶り合ふも多少の縁と云ふ事もよく云ひまするし、又相縁奇縁なんと云ふ事も申しますが、此縁は實に不思議で、佛教あたりでも七千餘卷のお經があつたつて、縁と佛生との關係を説いたに過ぎないのでありますから、縁は實に不思議で、奥村女史の兄さんで、奥村圓心と云ふ人が、明治の始めから朝鮮で布教すると云ふ時に、その後楯になつて智慧を授け

方針を授けられたのが、恐れ多くも總裁官殿下のお祖父様に當られた岩倉具視公であつたのであります。そののみならず、今度奥村女史が朝鮮に來まして活動して居つて、さうして明治三十二年に東京に参りました時が、初めて總裁官殿下に拜謁を仰せつかつた時なんでありまして、それは三十二年七月二十三日と私は覚えて居りますが、御沙汰がございまして、さうして小笠原に奥村を連れて参殿しろと云ふ御内命があつたのであります。

それから奥村女史を連れて御殿に出ますと、三時間に亘つてお聞き遊ばされて、さうして奥村女史が御殿を退出して参りますと、わざ／＼老女を控室にお遣しになつて、眞に今日は非常に有益な話を聞いた、ついでにはもう一度來て話をして貰ひたいと云ふ斯う云ふお話で、それが七月二十三日でありまして、第二回目に拜謁を致しましたのが、八月五日と覚えて居りますが、其時は私は参りませんで、奥村女史一人でお伺ひをしたのであります。さうして又も數時間に亘つて、此の時は唯だ單に朝鮮ばかりでなく、東洋の大勢に亘つて言上したと私は覚えて居ります。さうして戻つて参りますと、お使ひが見えまして、さうして、非常に有益な話を聞いた、ついでには此の次に出て來た時には、岩倉家に行つて、公爵夫婦にも話をしてくれなにか、と云ふ御沙汰があつたのであります。それから今度次いで九月になりますと、又殿下か

ら御使ひがありました、さうして、奥村は此の前に來た時は、藥瓶を持つて上京したと云ふ事で、其の顔色が悪いし、又寝れてゐたやうであるから、あの子の容態はどうであるか、若しあの如きであるならば、もう一遍東京に出て來て貰ひたい、其の時分には高輪の御殿へ「ベルツ」を呼んで、見せてやりたいから此の事を取り計らへと云ふ事でありました。此の事を奥村女史に通じたところが、奥村女史は眞に泣き倒れました。實にどうも殿下に對し奉つて、縁と云ふやうな事を申上けるのは恐れ入りますが、岩倉具視公と圓心師との間にも一脈の諒解がなつてをりましたし、愛國婦人會と云ふ氣もなかつた三十二年、夙に拜謁の榮を擔つて、總裁官殿下の御紹介に依つて、閑院宮殿下にも拜謁を賜ひ、高輪の兩内親王殿下にも拜謁をしたと云ふ關係も生じて來たのであります。

もう時間もなくなりましたからこれで止めて置きますが、もう一言申上げて置きたい事は、奥村女史が御承知の偕行社で、愈々愛國婦人會を退くと云ふ時、非常に感激しまして所謂「舟辨慶」の一節の仕舞をしてさうして東京を去ります時に、高輪にお出で遊ばす兩内親王殿下に佐々木伯爵夫人から其の事を申上げましたところが、何時汽車が出るのかと云ふ御下問が小笠原のところへあつたのであります。そこで何時何時の汽車で發ちますと云ふ事を申上げました

ところが、丁度其の汽車が品川を發ちます時に、わざ／＼兩内親王殿下には御殿のお二階にお登りになられました、あの汽車に奥村が乗つてゐるのかと仰せられて、遙かにお見送りになられたと云ふ事でございます。

是れを持ちましても、如何に奥村女史が、高貴の御方々の御信用を得て居つたかと云ふ事が解るのでございますが、しかしこれも前に申上げました通り、唯單に強い一方で、大臣と組打ちをしたとか、大將をねぢつけたとか云ふ傾城水滸傳ばりのことではあつたのではなくして、座談が旨く、さうして人をそらさない、早く申しますと隅におけない誠に行き届いた人であつたのであります。

惜しい事に此の點が餘り世の中に知られて居なかつたので、而も其の座談が旨くて、又取り持ちが旨く、色々な藝を持つて、さうして此の人を反らさなかつたと云ふ事は、其の目的が何處にあるかと云ふと、さう云ふ事を一つの方便としてさうして、總て歸着する所は、國家と云ふ上なのであります。

若し今日奥村女史をして生存させてゐたならばどうでせう。聯盟の事等も、滿洲の事等も、恐らく夜も寝ないで、私共は毎日毎日攻め抜かれ、それこそもう尻つべたを鞭で打たれて、東

奔西走しなければならぬと、先程も總長にお話をしたのであります。此の時相を観るにつきましても、益々奥村女史を偲ばれるのでございますから、どうぞ皆さま方も皆さま方のお骨折りに依りまして、昨年廿四萬人も増えたと言ふ勢ひでございますから、尙一層馬力をかけて頂きまして、今年あたりは奥村女史が百人も千人も現はれるやうに御活動を御願ひ致しまして、そうして此の國家の爲にお盡しあらむ事を希望する次第であります。

——昭和八年二月七日講演——

奥村女子を偲びて、

總裁殿下の御高德に感激す

婦人團體として、世界一と云はれる我が愛國婦人會の生の母、奥村五百子女史は、廿八年前の二月七日、六十三歳を一期とし、合掌して、婦人會の行事を親しい友に託しつゝ、

「何時死んでも如來様は御引取り下さる」との日頃の大信念を、如實に現はした大往生を遂げたので、今夕は恰もその通夜に相當するのであります、逝去當時の女史の相好には、輝くばかりの歡喜の色が漲つて、云ふ許りなく尊い感じを示して居りました。それも其の筈で、女史が六十三年の經歷は、國家的活動を以て一貫して居るが上に、其の數多い事業の中での一度も自分の利益を計つたと云ふ事がない。就中其の全精神を投込んだ愛國婦人會設立の動機の如きは、正に我軍隊への、一大禮讚と云はねばなりません。明治三十三年の北清事變の際、偶々天津方面に居合せた奥村女史は、我が軍人が一杯の飲料水さへ得られないやうな、困難な場合

にありながらも、飽まで皇國軍人たるの品位を失はず、邦人の爲には勿論、隣國の老人や婦人の爲にも、命をも惜しまないで、之れを保護してやつた天晴健氣な舉動を見て、何うして感動せず居られませう。女史は我軍人に對する謝恩の念に全心を煽られて、迎もジツとして居られなくなり、

「我々日本婦人が外國人の辱を受けず、安泰にして居られるのは、天子様の御稜威と、忠勇義烈の軍人があるからである。されば私共婦人は、戦争にこそ従事できぬが、安閑として、軍人達が御國の爲に盡されるのを、見て居ては相濟む譯のものでない。御婦人の皆様よ、半襟一かけを節約して戦歿兵士の遺族を救へ」との叫びを擧ぐるに至つたのであります。私は從來雄辯を以て聞えてゐる人々の演説を、澤山聞いて居りますが、奥村女史の講演ほど泣かされた事は他にございません。

女史が病體を提けて演壇に立ち、涙滂沱として、我將兵の健氣さを語り來るとき、其面上には熱情燃え、其の聲には同情が溢れ、聴き入る御婦人方は申すに及ばず、髭武者の荒くれ男でも、泣かすにはゐられなかつたのであります。婦人會發會式の際の如き、聴者の一人であつた島田三郎氏などは、終ひに其座に居堪まされず、ハンケチで顔を押へながら隣室に駆け込んで泣

いた程でありました。私共は、今憶ひ出してさへ、眼頭が熱くなるのを禁じ得ませぬ。

月日は流れて、いつしか明治三十七年となり、日露戦争は勃發しました。其の際各戦地にある將兵より、奥村女史宛の感謝の手紙は續々到着したのであります。一例として其中より一文を取出し、之れを次に掲げて見ませう。

拜啓小生は陣中にありて貴下に一書を呈するの光榮なるを喜ぶ者に候。小生は此度の大快戦に會し、貴下等の熱誠に依りて生れたる愛國婦人會が、如何に多くの熱誠と、如何に多くの女性的義勇奉公心とを誘發し、以て皇軍のために盡し、以て國家のために貢獻することの大なるかを記憶し、爰に滿腹の精神を捧げて感謝の意を表するものに候。而して余が今踏破しつゝある戦地の婦人が、如何に疑懼の念と卑怯の舉動に驅られ、其の醜態を暴露して恥ぢざるは、老大國の教育が彼等をして、斯の如き天性を習はしむるに至りたるを、深く慨せずんばあらず候。余は曩年北清事變に従軍し、貴下が陣中を慰問し、國兵に尠からざる慰安と奨励とを與へられたるを忘るゝ能はず、而して今や、貴下の首唱にかゝる婦人會が全國に普及し、多大の効果を軍國の上に、寄進せらるゝを聞くごとに、益々敬慕の情に不堪、茲に一書を呈して、貴下及び會員諸氏の健康と幸福とを祈るものに候。勿々。

明治三十七年八月二十七日

在外

第三軍第一師團彈藥大隊本部附

陸軍歩兵軍曹 天 浦 覺 玄

奥村五百子様

と認めてあつた。第三軍と云へば、申すまでもなく、乃木將軍の率ゐてゐた旅順攻圍軍なので、同軍は明治三十七年八月十九日より二十四日に亘り、旅順の敵に對して始めて總攻撃を開き、攻撃の主點を要塞の東北面なる二龍山、東鷄冠山の兩堡壘間と定めて、部下たる第一師團第九師團、第十一師團を擧げて強襲法に依り、一舉に敵の堅壘を踏破らうと企てた。が、敵も必死の防戦頗る強硬なるのみならず、難攻不落と看板打つた無双の要害に據つて、互に連絡を取り、正面竝に側面より、大小無數の彈丸を拳下りに雨霰と注ぎかけるので、あはれ、我突撃隊は屢々全滅の悲運に遭ひ、戦闘次第に苦境に陥らうとしたが、乃木軍司令官は猶も屈せず、終に師團の全滅を賭して突撃を繰返すべき命令を發するに至つた。是に於て劇戦は其の極に達し、彈藥が盡きると銃劍を以て切結び、劍が折れると石礫を投合ひ、遂ひには組打して齒

と齒で噛み合ふと云ふまでに慘狀を呈した後、辛うじて目的の一部は達したが、我軍の損害は非常に多く、死屍累々として高臺の全斜面を掩ふに至つたので、有繋の乃木司令官も、終に攻撃の繼續を断念し、悪戦苦闘六日の後、即ち八月二十四日に至り、命令を發して強襲的攻撃を中止し、各師團をして、占領地を固守せしむる事にしたのであります。

前記の天浦軍曹の手紙は、此の激戦後三日を経て認めたものでありまして、斯様な悪戦苦闘に遭遇した時彼等、將兵をして、益々義勇奉公の念に燃えたゞしめるものは何んでありませうか。申すまでもなく、國民の彼等に對する篤い信頼ではありませんか。深い同情ではありませんか。私なども覺えがあります。戦地に出で、大敵と戦ひ、波風と戦ひ、寒暑と戦ひ、記録の一枚々々を血を以て色彩るやうな悲壯な境遇に立つた際、同胞は飽くまでも自分等を信頼し、安んじて國家の運命を任せてゐると解した時程、緊張させられる事は無いので、實に身顛ひが出る程になり、大敵も波風も、ものゝ數とは思はない位に感奮するのであります。

況してやそれが、戦争などには關心を有たるゝことが薄からうと考へてゐた御婦人方の激励とあつては、一層の奮起を促され、實に、他人より先きに戦死するの名譽を、擔ひたいまでになるものであります。斯様な譯でありますから、愛國婦人會々員たる方々の、軍隊に對する責

任亦重大なりと云ふべきであります。それについても私は、奥村女史の眞心が泌々偲ばれて  
なりませぬ。

六十三年唯至誠、身を忘れ國を憂ひて斯の生を畢る。之れは生菩薩とまで云はれた眞宗近世  
の碩徳南條文雄博士が、奥村女史を追悼した詩の最初の二句でありまして、洵に女史の爲人を  
言顯して餘蘊ないのでございます。

又女史の臨終に侍してゐた廣岡淺子刀自——此人は女史と最も肝膽相照した親友で、當時兩  
女傑の稱があつた人であります。其の淺子刀自は、女史の臨終に就いて、大略斯う話されてを  
る。

「女史は婦人に得難い長所を持つて居られました。それは國の爲、人の爲には身命を捧げて一  
歩も退かないのであります。又一つの仕事を受け合ふた以上は、死んでも止めないと云ふ美し  
い精神であります。

その點を以て私は友として交つて居りました。五百子も亦私を友と信じて居つたのでありま  
す。……(中略)……此度病氣が餘程重いと聞きましたので、見舞に参りました。いろ／＼平  
日の通り談話をされました。これで、自分は愛國婦人會を作りは作つたが、學問がない爲に志

は半途しか遂げられない。會は今六十萬の會員を有して盛大になつてゐる様に見えるが、決し  
て成功はして居らない。どうかして會を眞に國家の爲になる會としてくれろと懇々私に頼まれ  
たのであります。其の臨終の際には實に立派な死様であつた。私は今まで此様な臨終は見たこと  
がありません。五百子はともかくもあれだけの働きをして、それで自分は少しも成功したと思  
はないのは實に偉いと云はねばなりません。

その志を眞に遂げさせるには、婦人が起ねばなりません。五百子が一人で聲をからした事を  
大勢の婦人の力で成し遂げなければなりません。それでなければ國家は救はれないのでありま  
す。此時に當つて私は、切に皆さんの御奮起あらん事を望むのでございます。

此談話に據つて見るも、奥村女史が死ぬまで、國家を憂ひ、婦人會の前途を深く心配してゐ  
たことが痛感されるのであります。

併し、いかに奥村女史が熱烈であつたにしても、其の力だけでは、決して今日のやうな盛大  
な婦人會を作ることには出来ませぬ。其處には近衛篤磨公を始めとして、澤山の名士が相談に興  
り、或は後援者となつたりして女史を助け、思ふ存分に女史をして活躍せしめたのであります  
が、猶その上に前總裁であらせられた、閑院宮妃殿下、現總裁であらせられる東伏見宮妃殿

下、御二所様の、筆にも盡されぬ程の御眷顧を辱うした事が、女史をして、いやが上にも感激奮起せしめ、身も心も捧げて、國家守護の大任に當る軍隊のため、後顧の患ひなからしめやうと、決心するに至らしめた一大原因なのでございます。

奥村女史がやんごとなき方々様に始めて拜謁仰付られ、有難き御意を頂戴したのは、愛國婦人會を興す二年前即ち明治三十二年の事で、當時女史は朝鮮に於て、一大事業に従事して居られたのであります。さうして東伏見宮妃殿下に拜謁の後、偶ま病を患ふて暫時郷里の肥前唐津に起臥することゝなりましたが、斯くと聞し召された妃殿下には、親王様に書道を御指南申上けてゐた杉山令吉氏をわざ／＼私方にお遣しになり、

「奥村の病状は如何であるか、なほはかく／＼しくないやうならば、小笠原より勸めて出京させては何うであるか、然うすれば當方にて、ベルツ博士の診断を受け得さすやう取計らうであらう」

と仰越されました。奥村女史は何と云ふ幸福者でありませう。斯程まで厚き御仁慈に浴しては女史ならずとも、誰か感激に打たれずに居られませうか。況して人並はづれて感受性の強い女史でありますから、私より此の恩命を傳へ聞いた時、オイ／＼聲を擧げて泣いたと云ふのは

然もあるべきことゝ存じます。さうして次のやうな電報を私方へよこしました。

「身に餘る果報、五百子は石に噛りついても死にませぬ。よろしくお禮言上を願ひます」

此の一條に徴するも、女史が如何に厚い御愛顧を被り居りしかを、推知するに足るでありませう。

奥村女史逝去の當時、六十萬人の會員であつた婦人會は、次第に發展して今や二百萬人に達し、世界に於て最も大なる婦人會となつて居ります。これは歴代の會長以下役員諸姉の獻身的努力に依ること多いのは勿論であります。恐れながら、東伏見宮妃殿下が、前總裁殿下の御志を繼がせられ、總裁の御位置に立たせられて、金枝玉葉の、加之荒き風にも堪へさせ給はぬ御女性様の御身を以て、東奔西走、文字通り御席暖まるの暇ない程の、御活動をお続け遊ばさるゝ結果と拜察する次第であります。

長くも總裁殿下に於かせられては、昨年の如きは、長崎縣以下八縣、及び北海道にならせられたる外、海には海豹吼え、陸には馴鹿駆ける樺太までもお渡りになつたのであります。其の御出發に先立ち拜謁致しました際、私は亡き奥村女史に代つて篤く々々御禮申上げ、

「恐れながら浪荒き北海を越えさせ給ひ、遠く樺太までもお渡り遊ばされて、御國のため婦人



會のため御盡瘁遊ばされる御事は、嘗に婦人のみでなく、男子にとりても此上もない刺激となつて、いか許り奮起致しますこととございませう。奥村女史の靈は、唯々有難涙に暮れ、合掌して御禮申上げて居る事と存じます」

と言上したる所、殿下には感慨無量の御面持にて、

「奥村女史が世に在りし時は、六十餘歳の上に痛く健康を損ねて居たにも拘らず、藥壘を携へ草鞋を穿いて、内地は云ふまでもなく、朝鮮滿洲までも行脚して、本會のため盡してくれたのではないか。壇上に吐いた其の血汐の一滴々は、御國のため皇軍のため捧けた尊い珠玉でなくて何んであらう。それに較べると、自分の旅行の如きは、云ふにも足りない程である。自分は將來も力の續く限り本會のために盡し、何んとかして會員が一千萬以上に達するやうにしたいと思ふてゐる。さうなつたら奥村が命がけて御國に盡した志に、始めて報ゆることにならうと思ふ」

此御言葉を拜聽しました私は、有難さに胸逼つて、御前と承知しながらも、涙を留めることが出来ず、さしうつむいたまゝ御前を退出致したのであります。

仄に拜承しますと、總裁殿下には本年秋には、遙々朝鮮にお出まし遊ばすとの御事でありま

す。前にも申述べました通り、朝鮮は奥村女史が海外雄飛の最初の場所で、其處へ成らせられると申すのも、深い御因縁の致す所、女史の英露は、必ずや御尊體を御守護申上げ、大々的効果を御齎しに相成ることと確信仕る次第であります。

今や婦人會は、非常時に直面して、一大飛躍を試みつゝあると同時に、其の本旨に基き致々として、時代に順應する新事業、例へば種々の社會事業、婦人報國運動等に着手してをられます。誠に結構なことで、私は之れに對して滿腔の賛意を表するのであります。爰に謹みて總裁殿下の御健康を賀し奉り、會の前途を祝福致します。

—昭和九年二月六日放送—

### 奥村愛國婦人會會祖を語る

歲月から申すと三十九年、會員數は二百六十萬、愛國婦人會は盛んなりと云ふ可しであります。これは勿論皇室の御威徳と、總裁殿下の御奮勵、又會長以下それぞれの方々の勉強による事勿論であります。一つはその會祖とも云ふべき、奥村五百子女史の人爲りが長く流れてゐるのであります。源が濁つてゐては、その末が清いと云ふ事はありません。

奥村女史は、一口に云ふと感激の人であります。愛國婦人會を拵へる前に、既に二十歳の折に男装して長州に乗り込み、高杉晋作と大激論をしたこともあります。その後、西郷隆盛に會見したり、支那、朝鮮に事業を起すなど始終國家の爲に活動はしてをりましたが、それらは全てがこの愛國婦人會と云ふ一大事業を起す爲の序幕に過ぎなかつたのであります。換言すれば、天が奥村女史をして、この大々の事業を起させるため試練時代を與へたとも云へませう。一體、奥村女史と云ふ人は、非常に感激の強い人で、それが溢れる時に常規を逸するやうな事

がなくもなかつたが、結局愛國婦人會と云ふ大々的な婦人會が出来たのも、奥村女史の感激性の強さに因る點も多かつたと思ふのであります。

奥村女史が此愛國婦人會を創立されます時の骨折は非常なもので、それに、その前から身體が悪くて吐血を幾度もし、又は郷里から上京の折も、朝鮮から歸國の場合も、何時でも藥瓶持參である。背には大きな荷物を負ひ、男の穿くやうなメリヤスのズボン下を穿いて下駄ばきで方々歩いてゐたものです。當時私の宅は、只今の代々木にありましたが、あの甲州街道を一ヶ月に一度位は、その異様な服装でやつて來るので、小笠原の家には氣狂ひ婆さんが月に一度づゝ行くと云ふ評判になつたほどであります。奥村女史は方々奔走してゐる間に氣難しくなる、癩癩を起す、私の宅の女中なども、その取扱ひには困つたものです。世間では奥村が一つ怒り出したらそれを宥めるものは前の近衛公爵か、その他二二の者だと云つてゐますが、もつとそれ以上に奥村女史の頭の上らなかつたものが、一人居る、それは大臣でもなければ大將でもない、私の宅にゐた用助後に重五郎と申した老僕であります。

#### 女史と忠僕用助

丁度維新當時、私の父は徳川家の閣僚をして居りました關係上、頻りに國事に奔走して居りましたが、この用助と云ふ老僕がいつも父の傍についてゐました。隱密にもなれば、刃の下をも潜る、十五の年からこの方、それこそ影の形に添ふ如くでありました。後に例の生麥事件英國人が斬られて、その爲に有名な事件であります。當時、父は獨斷でその償金を拂つた爲、遂ひに淀にある或寺に押込められた事があります。この時も用助は傍について居りまして、毎日世間の様子を見て來ては、父に告げました。或時駈込んで來て、近々、殿様の御勘氣が有りますと云つた。

父は、そんな馬鹿な事があるものか、と云ふが用助はどうしても聞かない。ところが廿日ばかり経つと用助の申した通り、御赦免になりました。その時に父は涙を流して、彼の忠實を喜び、十五歳の折、俺の所に始めて來た折と少しも變らないと申したそうです。その言葉に感じたと見えまして、其の後、自分で重五郎と改名して、俺は十五の時の積りで居れと申されたから重五郎だと稱して居りました。

彼が十五歳で始めて賄方に出ました時、毎晩夜になるとゐなくなつて、朝になるとちゃんと歸つてくる。上役が心配して或晩こつそり後をつけた。すると主家から大内村と云ふ自分の村

は二里許り離れてゐる、そこへ今日で申しますと十時——四つ頃になつて上の御用が濟むと直ぐその足で駆け出して行く。自分の家に歸り、戸をとんと叩くと、中から老母が戸を開ける。上役が片蔭で聞いてゐると、母親が「お前は毎晩自分の家へ歸つて来て好いのか」と云ふ。「自分の用はすつかり濟んでゐるのだからお母さん安心おしよ」と其の日の所謂殿様のお餘りを持ち歸つて母に食べさせる、親子睦まじく主家の有難さを語つて夜の明けない中に、また主家まで引返して行くのであります。これを蔭で聞いてゐた上役は、その時に貰ひ泣きをしてしまつた。この事が私の父の耳に這入つたので、御維新當時もつと自分の手許に置きました。

奥村女史は眞宗の高徳寺と云ふ寺の娘さんでありましたが、この用助の知り合ひの男が、女史の寺に寺男をしてゐまして、女史が六つか七つのいたいけ盛りになり、この用助の話をしては自分の村にはこんな親孝行があると云ふことを聞かせてゐました。それが女史の頭に浸み込んでゐたので、後年女史は用助に頭が上がらなかつたのであります。

この用助は私の父が御維新の際、奥羽地方に逃れた當時、父が無事であるやうにと掌に油を注ぎ、燈心をたらしして、その燈心に火をつけて三日三晩も願をかけたと云ふ事で、この掌が岩のやうになつてゐました。私共はその岩のやうな手を撫でると、その男の忠實さに觸れるやう

な感じがして、幾度も泣かされたものであります。彼は、小笠原の名物男と云つて、明治四十年に東京府の知事から表彰された事もあります。命も欲しがらず、名譽も欲しがらず、かう云ふ人間が一番始末が悪いと西郷翁が云はれましたが、重五郎はさう云ふ質の男であります。

私に向つて終生の希望はたつた一つ、自分の墓には私の家の紋所をつける事を許してくれ、それだけの事が、此の僕の私に對する、否私ばかりではない小笠原家に對する希望であつたのであります。で墓には拙宅の紋をつけてやり、山口重五郎と書いてやりました。奥村女史が近衛公爵とかその他の顯官と激論して歸つて来る、女中どもが、又今日は、奥村さんが怒つて歸つて来たと云ふやうな時には、

この用助が出て来る、「奥村サン、又怒ツチョルナ」と國言葉で側へ行くと直ちに天氣回復で、「何ダ、山口ノ伯父サン、又叱リ居ルナ」と云つて機嫌が直る、これ程感激性の強い人であつたのであります。

### 日本武士道に感激した女史

この愛國婦人會の創立も、この感激性から生れたもので、奥村女史が本願寺から北支那へ布

教の様子を視察に派遣された時に、丁度明治三十三年の北清事變が起つたのであります。即ち國匪の亂と申して外國人を目茶苦茶に殺すと云ふ所謂亂民が起つた。そこで、各國が澤山の兵を出した。御承知の白石と云ふ人が、ターターの一番乗りをしたと云ふのも此の時、又東郷元帥がターターで、アレキシーフと面談中、ロシアの海軍の軍備を見破つて、其の後の日露戦争に非常に貢獻したと云ふのも此頃の話であります。

此時、奥村女史が北支那へ行つてゐたが驚いた。各國の兵隊が、中には軍規を守つてゐるものもあつたらうが、その多くは見るに忍びない亂暴をする、たゞ日本兵だけが、どんな苦しい場合にも、軍規を守り、支那人を自國の人と同じ様に保護してやる。御承知のやうに、支那では水を飲みたいと思つても泥水だ、手拭でもつけなければ色がつくと云ふ程で、飲料水にはならない。其の邊の畑の黍の莖から水分でも取らうとして折つてみれば、之れもからからだ。そんな土地にあつても日本人は少しも軍規を亂さない。此の様子を見た感激性の強い奥村女史は、泣き通しに泣いた。當時女史の手紙には、一つとして涙なくして讀む事の出来ない程涙で綴られてゐるのであります。男が之れ程忠實に國家に盡し人道道德を重んじてゐるのに、女が唯安閑としてゐる譯には行かない。一年に半襟一かけを節約して、せめてそれだけの金でも醸金して

戦さに出てゐる兵士達に、向後の憂ひない様にと心に期せられる所があつた。

#### 女史の泣きの一手は遂に重臣の心を動

かす

三十四年一月九日に、東京に歸つて来て、其の日に早速私の所へやつて来た。丁度其時私は、今日で申しますと流行性感冒で、醫者から絶対安靜面會も禁じられてゐたので、執事が斷ると奥村女史が怒つて、國家の大事に何んだ、病氣位が……と云ふのでつかつか私の部屋に入つて来た。恐ろしい顔で這入つて来たから、これは又何か持つて来たなと思ふと、この話でやつて来た。泣きつきりです。奥村女史はむしろ泣蟲であつた。孝子の爲に泣き、國家の爲に泣き、あつちで泣き、こつちに来ては泣き、恐らく奥村女史の一生を眺めて見たら、笑つてゐた時よりも、泣いてゐた時の方が多いだらうと思ふ位です。その時も手離して泣いた、自分を近衛公爵の所へ連れて行けと云ふ、そこで二日経つて病ひを押して近衛公爵の所へ連れて行くと又支那の狀況を述べた。

長くも總裁殿下の御耳に入る女史の

誠心

女史の歸郷が御耳に達したと見えまして、一月の廿日頃に奥村を伴れて參殿せよと云ふ御命令が私の所にありました。參殿致しましたのは、たしか、一月の廿日か廿一日と覚えてをります。今日は東伏見宮様と申上げて居りますが、其の當時は小松若宮妃殿下と申上げました。當時妃殿下は廿六でお出で遊ばしたのでありますが、三時間に亘つて奥村女史の話を涙を以てお聞き遊ばした。奥村女史も泣いて申上げました。私も脇に居りまして、矢張、餘りの奥村女史の熱誠に動かされ、又妃殿下の御高德に泣かざるを得なかつたのであります。即ち三時間に亘つてターター、天津、旅順の模様當時の領事の奥さんが、どんどん彈丸の來る中で怪我人の看護をしたことの様子などを手にとるやうに申上げました。そうしてさてかうなりますと、女でも安閑としては居られません。どうしても御國の爲に一つの團體を作つて出征してゐる兵士方に後顧の憂ひなからしめるやうにさせたいと申上げました。實に御縁は不思議なもので、其後閑院宮様の妃殿下が最初の總裁におなり遊ばされて、最初の會長が只今の總裁即ち小松宮妃殿

下の御母堂にあられる岩倉公爵夫人がなられたのであります。そしてこの閑院宮様の妃殿下に次いで今度の總裁におなり遊ばしたのが、現在の東伏見宮妃殿下であらせられる。

一番始め、此の北清の模様をお聞き遊ばされ、愛國婦人會の知識と云ふものについてお聞き遊ばされたのが、即ち、只今の總裁であらせられると云ふ事は、決して偶然とは思へない、其處に非常な神祕があると私は思ふのであります。そこで妃殿下の御賛成を得た奥村女史は、非常に意氣軒昂となつて、これからは一日も早くやらうと云ふので、其の年の二月二十四日か五日に初めて、當時學習院女學部の前に禮法講習所があつて半分空家みたやうになつて居つた。當時はまだ、愛國婦人會とは云つてゐなかつたのですが、そこで協議が始められました。近衛公爵御夫婦と、岡部子爵御夫婦、二條公爵、下田歌子女史、山脇房子女史、奥村女史、堀内陸軍中將、私とこの十人、午前九時頃から會議を開きました。が晝頃になつて、何んとかこれは皆さんがお腹が張るだけのものをしなければならぬかと考へて居ると、奥村女史が私をちよいと蔭に呼んで自分の懐を「ボン」と叩いて「今日は何も持つてゐませんよ、あなた持つてゐますか」と云ふ。私もその時財布をこつそり開けて見ますと、拾圓札一枚入つたきり、私はその當時大尉でありまして、なかなか金を自由にする事は出来ない。奥村女史は拾圓でもよい、

それで何うにかしようと、奥村女史の事ですから、そこらを駈廻つて、ピーフテキーを十枚、又後からお壽司を一皿、お腹が空いてゐるから、近衛公爵でも二條公爵でも、このピーフテキーは味がよいと云つて喰つて居られた。私のポケットから出てゐる事は知らない。

過日あの總會(三十五回)の光景を思ふと、この日の集りの事は夢の様な感じがします。總會當日、私が會場へ來ました時には、追ひ返されて、不本意な顔をして周りに立つて居られるやうな有様で、實に氣の毒に思ひましたが、何んとしても二萬三千人這入ると思ひもよらなかつたのですから、如何とも仕様がなかつたのであります。其の節の晚餐會の折に、殿下が「此の様子を奥村女史に見せてやりたかつた」と仰せられた。此御言葉を奥村女史に聞かせたい。

否、奥村女史の様な靈魂は決して滅びてゐないから、そこに居られたに違ひない。此の妃殿下の御言葉を承つて、如何に感激性に富んだ奥村女史が、感激しただらうかと思つたのであります。併し私共は二百六十萬位の會員を以て満足してはならないのであります。尠くとも皇紀二千六百年迄には五百萬人の會員を得たいと云ふのが我々の希望でありますし、又それは出來得ると確信してゐるのであります。

それから尙進んでは、一千萬にもなるべきだと思ふのであります。恐れながら妃殿下に於か

せられましたは、金枝玉葉の御身をもたせられて、北は樺太から、南は朝鮮まで、進んでは滿洲までも行きたいと云ふ思召を持たせられます。それと云ふのも全く、恐れ多い事ながら、國家を思召されると共に、奥村女史の此の忠誠を遂げさせてやりたいと云ふ思召しだと、我々は殿下の御高德に感激して居る次第であります。

家系年譜



家系

〔父〕 了 寬

左大臣二條治孝ノ三男寬齊ノ子  
文化十三年生 慶應四年（明治元年）二月十二日歿 行年五十三

〔母〕 淺 子

小笠原藩士山田圓太夫ノ長女  
文化七年生 明治八年歿 行年六十六

〔兄〕 圓 心

了寬ノ長子  
天保十四年生

五百子

了寬ノ長女 圓心ノ實妹 二條基弘公ノ從妹  
弘化二年五月生 明治四十年二月七日歿 行年六十三

〔長女〕 敏 子

父ハ鯉淵彦五郎 明治六年生

〔次女〕 光 子

父同前 明治八年生

〔長男〕 勢 一

同前 明治十一年生

〔妹〕 七 百 子

異母妹  
安政三年生

年譜

弘化二年 (當 歲)

肥前唐津ノ高德寺ニ生ル (五月三日)

嘉永二年 (五 歲)

夙ニ音樂舞踊ヲ嗜ミ、三味線等ヲ學ブ

嘉永三年 (六 歲)

天然痘ニ罹ル

嘉永四年 (七 歲)

唐津神社ノ祠官戸川惟成ニ就テ讀書、習字ヲ修ム

安政三年 (十二 歲)

異母妹七百子生ル

安政五年 (十四 歲)

春ヨリ家事、裁縫ノ道ニ勤シム 此ノ間尙、時々戸川氏ノ教ヲ乞フ

安政六年 (十五 歲)

春、大阪在住ノ叔父、山田勘右衛門ヲ訪フ、滯留ニケ月ニシテ歸ル

萬延元年 (十六 歲)

國事日ニ危急、鎖國攘夷ノ論沸騰ス

文久二年 (十八 歲)

父命ヲ奉ジ、王政復古ノ謀議ヲ懷ニ戰亂ノ巷長州ヘ使ス

爾後屢々父兄ノ命ニ依リ、京都、山口、太宰府、福岡、博多等ヘ往復ス

慶應元年 (廿一 歲)

福岡藩ノ大獄ニ方リ、十月二十六日馳セテ之ニ赴ク 前日ヲ以テ事早クモ潰ユ

此ノ前後、太宰府ニ野村望東尼ヲ訪フ

慶應二年 (廿二 歲)

福成寺ノ大友法忍ニ嫁シ、婦道全ス

慶應三年（廿三歲）

父、大患、家ニ就キテ専心孝養ス

明治元年（廿四歲）

父了寛死ス、行年五十三歲

明治二年（廿五歲）

夫、大友法忍病死ス、夫ノ死ニ依リ生家ニ復歸ス  
兄ノ志ヲ承ケテ京都ニ出入、國事ニ奔走ス

明治三年（廿六歲）

水戸ノ浪士鯉淵彦五郎ニ再嫁シ、新家庭ヲ平戸ニ營ム、生計甚ダ困シム

明治六年（廿九歲）

長女敏子生ル

明治八年（卅一歲）

落魄水戸ニ赴ク

次女光子生ル

母、淺子病死ス、行年六十六歲

再ビ唐津ニ歸リ商業ヲ營ム

明治十年（卅三歲）

西南ノ役、君國ニ奉ズルノ途ニ於テ、一時、當路ト見ヲ異ニス  
兄、圓心、韓國釜山ニ渡航シテ布教ニ従事ス

明治十一年（卅四歲）

長子勢一生ル

明治十九年（四十二歲）

福岡ニ移リ商業ニ従事ス

明治二十年（四十三歲）

國事ニ關シ夫妻ノ間、意見ノ杆格ヲ來シ、九月二十五日離別、自ラ三兒ヲ具シテ唐津ニ歸ル

明治二十二年（四十五歲）

憲法發布セラル

選舉運動等、政治及地方ノ問題ニ熱中シ、屢々東京ニ往復ス

明治二十四年 (四十七歲)

樺山中將ノ紹介ニテ、農相榎本武揚子爵ト會見、海軍用地ノ拂下ゲヲ受ケ、唐津ノ共有ト爲スコトニ盡力ス

松浦橋(長三百餘間)ノ新設ニ當リ、官林ノ拂下ニ奔走シ成功ス

明治二十五年 (四十八歲)

議會解散、選舉運動ニ從事ス

大隈重信伯ノ知遇ヲ受ケ、諸名士ト交游ス

製絲會社ヲ劇立ス

二女光子ヲ群馬縣富岡ニ派シ、共進社ニ就キテ技ヲ學ベシム

縣下各村ヲ巡遊シテ蠶業ヲ獎勵シ、縣知事ニ迫リテ補助金ヲ受ケ、桑苗十萬本ヲ各村ニ配付ス

明治二十八年 (五十一歲)

夏、上京シテ唐津貿易港認可、鐵道敷設ノ事ニ就キ要路ノ間ニ運動ス

明治三十年 (五十三歲)

時事ニ感ズル所アリ、六月三日兄圓心ト共ニ上洛ノ途ニ就ク

七日、東本願寺京都事務所ニ出頭、韓國布教ノ事等三ヶ條ヲ申請ス  
法主光瑩伯ヨリ東上ノ命アリ、刀自ハ貴婦人會ノ組織ヲ囑セラル  
近衛篤磨公、圓心ニ東邦ノ大勢ヲ告グ  
九月二十二日、圓心全羅南道ノ光州ニ入ル  
布教地ニ於ケル兄ノ困苦ヲ頌タント欲シ、刀自亦十月十四日光州ニ到ル  
光州ニ實業學校設立ノ要件ヲ帶ビ、同月二十一日發、歸朝ノ途ニ就ク

明治三十一年 (五十四歲)

四月八日、刀自ノ一行九名光州ニ着ス  
病ヲ押シテ奮闘ス

五月十七日發程、京城へ往復ス

七月二十一日、光州發歸朝、九月三日、復渡韓

九月十日、校舎ノ上棟式ヲ了ル

大隈伯ヨリ農具寄贈アリ

十月二日、病ヲ養フベク唐津ニ歸ル ヤガテ南清ヲ視察セムトス

明治三十二年 (五十五歲)

東伏見宮妃殿下ニ召サレ七月二十一日參殿、三時間ニ亙リテ實歴談ヲ爲ス  
八月五日、再ビ東伏見宮妃殿下ニ謁ス。岩倉家へ御口添ヲ賜ハル  
十月二十九日、刀自渡清ノコトニ決定ス  
御内沙汰ニ依リ、光演法主ト同伴シテ閑院宮ニ伺候、兩殿下ニ拜謁ス  
十一月十二日、東伏見宮妃殿下ニ拜謁仰付ケラレ色紙ヲ賜ハル  
十二月四日、近衛公爵邸ノ相談會ニ於テ、南清視察ノ件ニツキ打合ヲ爲ス  
十三日發、南清ニ向ヒ途中一旦唐津ニ立寄ル

### 明治三十三年（五十六歲）

一月十七日門司發、上海、福州、南京方面視察ノ途ニ就ク  
北清ニ蜂起セル義和團匪ノ餘波南清ニ及ビ、旅行危險、一應歸國ス  
南清ヨリノ歸途、京城ヲ經テ六月四日光州ニ赴ク  
七月十一日歸朝  
十五日、東京ニ於テ諸般ノ報告ヲ爲シ、併セテ北清ノ皇軍ニ慰員使ヲ差立ツベキ件其  
他提議ス  
七月十九日、近衛公ニ伴ハレテ小松大官ニ參殿、拜謁ス

八月六日京都ニ赴キ、難色アル東本願寺ノ當局ヲ動カシテ、遂ニ連枝ヲ北清ノ皇軍慰  
問ニ派遣ノ内議ヲ決セシム  
八月下旬、京都、唐津ヲ經テ京城ニ至ル  
十月九日、仁川ニ於テ北清慰問ノ連枝ト會シ、一行ニ加ハル  
十月十五日、芝罘、塘沽ヲ經テ天津ニ着ス  
十二月四日、北清慰問ノ歸途、仁川ヨリ京城ニ入り、一行ノ重立ト共ニ韓國皇帝ニ謁  
ス  
十二月十一日、仁川ニ於テ獨リ一行ト別レ、木浦、釜山ヲ經テ歸朝ス  
戰場慰問ノ結果、軍人遺族救護事業ノ必要ヲ痛感ス  
歸途仁川ニ於テ初メテ此ノ感想ヲ述ブ  
次デ釜山ニ於テ同趣旨ノ演說ヲ爲ス

### 明治三十四年（五十七歲）

上京、近衛公爵邸ニ於テ軍人遺族扶助ノ件ニツキ協議ス  
小松官ニ伺候シ、北清ノ狀況ヲ逐一若宮兩殿下ニ言上シ、次デ御心添ニ依リ、閑院宮  
ニ伺候、軍人遺家族救護事業ノ御贊同ヲ忝ウス

二月六日、貴族院議長官舎ニ愛國婦人會創立ノ相談會ヲ開キ準備ヲ了ス  
同月二十四日、麴町區平河町禮法講習會ニ發起人會開カル 事務所ヲ定メ、假常務員  
七名ヲ舉グ

同月二十七日、岩倉公爵夫人愛國婦人會長ト爲ル

三月二日、借行社ニ催フサレタル會員獎勵會席上熱辯ヲ振フ 明治四十三年ニ至リ此  
ノ日ヲ愛國婦人會創立記念日ト定メラル

四月十八日離京、關西、中國、九州地方遊説ノ途ニ上ル 多數ノ入會者ヲ募リ得テ九  
月十三日歸京ス

十二月六日、更ニ大阪、兵庫、神奈川各地ヲ巡歴、翌年二月九日了ル

#### 明治三十五年 (五十八歲)

三月二十七日、會誌『愛國婦人』第一號發刊

同月十三日發、京都、滋賀、岐阜、愛知、三重、神奈川各地遊説、六月九日歸京

七月十日出立、北海道巡歴、八月十六日歸京

十月十八日、長野、新潟ノ遊説ニ向ヒ、十一月二十日了ル

十二月十日、四國地方ノ遊説ヲ志シ、十二月二十四日了ル

#### 明治三十六年 (五十九歲)

三月十九日、閑院宮載仁親王妃智恵子殿下ヲ愛國婦人會ノ總裁ニ推戴ス

四月十三日、遊説ノタメ京都、和歌山、三重、栃木、千葉、山梨、石川各地ニ向テ出  
發、八月十二日歸京

十月十五日、出發、靜岡、愛知、福井、滋賀、京都、大阪、愛媛、大分各地ヲ遊説シ、  
翌年二月ニ至ル

#### 明治三十七年 (六十歲)

一月二日、近衛篤磨公薨去

二月十四日、大分市演說會場ニテ略血、遊説ヲ打切り唐津ニ歸臥ス

#### 明治三十八年 (六十一歲)

愛國婦人會總會ニ於テ定款成立

日本婦人ヲ代表シテ皇軍慰問、戦死者弔訪ノタメ滿洲ノ野ニ向フ 六月二十九日發、  
十月十五日歸京

#### 明治三十九年 (六十二歲)

新宿御苑ニ戰後ノ愛國婦人會總會ヲ開ク 皇后宮行啓ヲ賜ヒ、空前ノ盛會ナリ  
皇后陛下内謁ヲ賜フ

四月一日、勳六等ニ叙シ寶冠章ヲ授ケラル

京都、石川等愛國婦人會支部總會ニ際シ、總裁殿下ニ陪シテ臨場ス

七月十七日、九段偕行社ニ送別ノ宴ヲ開キ退隱

二十一日、唐津ニ歸ル

明治四十年 (六十三歲)

一月十六日、唐津ヲ發シテ京都ニ出デ、二十三日大學病院ニ入ル

二月五日、病氣危篤、七日卒ス

特旨ヲ以テ正七位ニ叙セララル

二月十日、京都東本願寺大學寮ニ於テ愛國婦人會會葬舉行ス

昭和十七年二月十一日印刷  
昭和十七年二月十五日發行

定價貳圓

【傳正】

奧村五

編著者

小笠原長生

發行者

市川銑造  
東京市芝區田村町一丁目三番地

印刷者

森島金治郎  
東京市麻布區宮村町七十八番地

東京市芝區田村町一丁目三番地

南方出版社

電話銀座(57)〇七〇・〇七六  
振替東京一六八五三六番

東京市神田區淡路町二丁目九番地

配給元 日本出版配給株式會社

新宿御苑ニ戰後ノ愛國婦人會總會ヲ開ク 皇后官行啓ヲ賜ヒ、空前ノ盛會ナリ  
 皇后陛下内謁ヲ賜フ  
 四月一日、勳六等ニ叙シ寶冠章ヲ授ケラル  
 京都、石川等愛國婦人會支部總會ニ際シ、總裁殿下ニ陪シテ臨場ス  
 七月十七日、九段偕行社ニ送別ノ宴ヲ開キ退隱  
 二十一日、唐津ニ歸ル

明治四十年 (六十三歲)

一月十六日、唐津ヲ發シテ京都ニ出デ、二十三日大學病院ニ入ル  
 二月五日、病氣危篤、七日卒ス  
 特旨ヲ以テ正七位ニ叙セララル  
 二月十日、京都東本願寺大學寮ニ於テ愛國婦人會會葬舉行ス

南方出版社



印刷 發行 定價貳圓

編著者 小笠原長生

發行者 市川鏡造  
東京市芝區田村町一丁目三番地

印刷者 兩友堂  
森島金治郎  
 東京市麻布區宮村町七十八番地

東京市芝區田村町一丁目三番地

南方出版社

電話銀座(57)兜七・兜六  
 振替東京一六八五三六番

配給元 日本出版配給株式會社  
東京市神田區淡路町二丁目九番地



海軍中將  
子爵

小笠原長生編著

# 聖將讀本

A5判二七二頁  
定價 一・八〇  
送料 一〇

本書は、盡忠至誠の聖將東郷元帥の遺徳遺訓を註  
釋解説す。今こそ、聖將のこの教訓を熟讀玩味す  
べき時である。

南方出版社刊



終

